



天満宮

題字／後西天皇御宸筆

特集

- ◆ 令和再興「雪月花の三庭苑」
- ◆ 「飛梅」 菅公が育まれた紅梅を受け継ぐ唯一の「飛梅」
- ◆ 天神さまと私——学校法人 作新学院 理事長 畑 恵さん

日本文化の中心地 京都

その文化の礎を築いた天神信仰発祥の社

北野天満宮の由緒

当宮は御祭神に菅原道真公（菅公）をお祀りした全国天満宮・天神社一万二千社の宗祀（総本社）の神社です。

天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天曆元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の天門にあたる北野に御鎮座致しました。天徳三年（九五九）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條天皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満大自在天神」の神号を賜り、さらに皇室・朝廷の崇敬を受け臣下として初めて二十二社に加えられ、官幣中社に列格、皇城鎮護の神として崇められるとともに、天満宮・天神社の総本社として崇敬されてきました。

創建以来、皇室との御縁深く、寛弘元年（一〇〇四）には一條天皇がはじめて北野社に行幸されました。以来歴代天皇の行幸も二十数度に亘り、さらに將軍家や有力大名の崇敬を受けました。菅公薨去延喜三年（九〇三）より凡そ百年の歳月をかけて誕生した北野の天神信仰は、平安京の天門にあつて、朝野を問わず人々の暮らしの最も重要な指針となり今日まで育まれてきたのです。

「文道大祖 風月本主」と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されるとともに、人々の心の支えとなる神として、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民に至るまで「天神様」として親しまれてきました。菅公は、学者・政治家また詩人・教育者として多方面に活躍され、生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在にも生き続けています。

千有余年に亘る歴史の中で受け継がれてきた天神信仰の根本を示すのが、当宮所蔵の国宝「北野天神縁起絵巻」承久本です。数ある縁起絵巻の中で唯一無二の神社絵巻物であり、その信仰性や描かれる世界観、美術的価値は世界が認めるところであります。

また現在の御社殿は、豊臣秀吉公の遺命により豊臣秀頼公が片桐且元を奉行として、慶長十二年（一六〇七）に造営された一大建築群です。御本殿は八棟造と称され、国宝の指定を受ける桃山文化の代表的建築です。その絢爛豪華さは謂うまでもありませんが、特に多数の桃山建築の中でその創建当時の規模そのままに保存されているのは当宮が唯一のもので、後世の権現造の原型となるなど、神社建築史に多大な影響を与えています。

菅公の御神霊を祀る北野天満宮は、御墓所・太宰府天満宮と共に全国天満宮の宗祀と称され、日本文化の礎、学問の神様として今日も多くの参詣者が訪れています。



【シンボルマーク】

平安京の天門に位置する北極星を星梅鉢と鳥居（北野）で捉えたマーク。北野は千二百年に亘り、国都として文化を育んだ平安京にて、天の神々の出入口「天門」に菅原大神が奉祀された聖地です。爾来、北野の地より全国に天神様の御神威が益々昂揚していきました。

表紙写真 — 北野の四季祭「青柏祭」の特殊神饌 —

例年6月10日に斎行する北野の四季祭の一つ「青柏祭」。祓えと清めの信仰に基づく神恩感謝と季節の変わり目にあたる無病息災と身体健全を祈願するこの祭典では、古来より炊いた御飯を柏の葉で包んだ特殊神饌をお供えする。（詳しくは14頁参照）



御挨拶

縄文時代より継承されてきた鎮守の杜に世界の共存共栄を祈る

先ず以て謹んで聖寿の万歳と皇室の弥栄、氏子崇敬者の皆様方のご健勝とご多幸をご祈念申し上げます。世界は今、戦後、人類共有のものとして構築されてきた理念や価値観・常識が脅かされ、覆される状況に目の当たりにしています。世界中に不安と混乱を招き続ける新型コロナウィルス、そして国際社会の規律に反し、武力による一方的な現状変更を強いるウクライナ情勢など、世界は戦後史上、経験したことのない難題を突き付けられています。

そのような中で、古来、我々日本人の心の中に生き続ける自然観や精神性、万物との共存共栄を祈る神道観は、今まさに世界に発信しなければならぬ普遍的価値であらうと思います。古より鎮守の杜で祈りの祭祀が行われ、神々に感謝を捧げ平和を願う心、神々や自然と共生する日本人固有の観念である「惟神の道」は、持続可能な社会を創り、現代の混沌とした世の中を照らす不偏不党の光ではないかと思えます。

御祭神菅公の活躍された平安時代、国都平安京もまさに戦乱と兵火・謀略・疫病・飢饉など、難題が繰り返された混沌の時代がありました。その中で菅公が類稀なる学識を以て、縄文から連綿と継承されてきた日本人の美的感受性を、「文道」によって内外に示し提唱された「和魂漢才の精神」は、まさに惟神の道が示す共生の精神そのものであります。

自国の歴史や伝統を重んじつつ、誠の心を以て他国の文化や技術を受け入れる寛容さが菅公の教えの根本であり、宇多天皇と菅公が礎を築かれた平安王朝文化の中で、菅公精神が指針となり、世界に誇る良識ある価値観が培われたのであります。激しく変容化する現代社会においても、いま一度我々は菅公精神に鑑みて、曇りなき眼で世の中の真実を見極め、行動する意識を持たなければならないと思えます。

扱、来る令和九年に斎行する菅公千二百五十年半萬燈祭まで、いよいよ残すところ五年に迫って参りました。創建当初は怨霊の神として祀られた菅公が、北野天神として奉られ、渡唐天神に代表される「詩文の神」芸能の神」と御神格が多岐に発展転化し全国に伝播されていく様は、すでに人口に膾炙するところであり、菅公は、後世「文道大祖 風月本主」と称えられますが、学道のみならず、茶道・華道・芸道・武道・書道など、あらゆる「道の文化」に惟神を現し出される神として信仰され、千有余年の時を経た今も尚、日本人の心の拠り所となっております。

このような歴史を顧みて、御祭神の御神慮を畏み、更なる御神徳の発揚を図るため、千二百五十年半萬燈祭では、北野の歴史や信仰に則った様々な神賑行事や文化行事を再興して参る所存であります。歴史を重んじ信仰を尊び「物事の本質を踏み外さず、誠を極める」を体現する「真の天神信仰」を発信して参りたく存じます。

新年度を迎え、来る半萬燈祭に向けた新体制のもと、先ずは祭祀の厳修を第一義に、天神信仰の発揚と神徳宣揚に務めるとともに、氏子崇敬者の皆様、地域の皆様、そして参詣者の皆様と共に、職員一丸となって様々な課題に取り組んで参る所存でございます。

今後とも皆様の格別なるご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

北野天満宮

宮司 橘 重十九

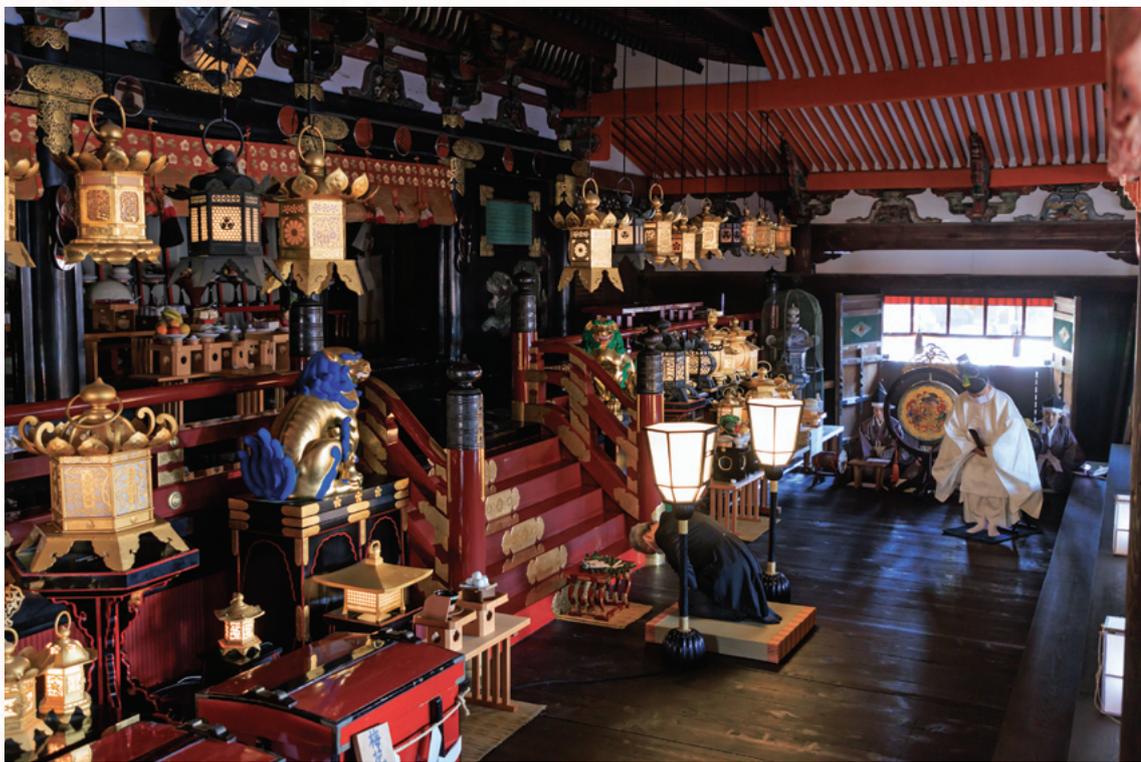


日本人の心に生き続ける鎮守の杜（史跡御土居の青もみじ苑）



皇室ゆかりの神事 梅花祭、菅公偲び厳かに齋行 皇后陛下の御代拝 参向され御拝礼

— 祭典に先立ち西廻廊では芸舞妓が献茶ノ儀 —



皇后陛下御代拝による御拝礼（宮内庁京都事務所長）



皇后陛下御代拝として参列される宮内庁京都事務所長

〈菅公御歌〉
東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花
主なしとて 春を忘るな

梅花をこよなく愛された御祭神菅公の祥月命日に当たる二月二十五日、御本殿において午前十時から、宮司以下祭員とともに、かつて菅公に随行して九州大宰府に赴き、薨去後は菅公自作の木像を奉じて京へ帰り、代々神事奉仕に携わってきた西ノ京神人の末裔「七保会」と、北野の門前花街上七軒歌舞会のご参列の下、梅花祭を厳かに齋行し、御祭神の御遺徳を偲んだ。

菅公は、無実の罪によって左降された九州大宰府の地において、延喜三年（九〇三）二月二十五日薨去された。梅花祭はその御遺徳を偲ぶとともに、御神慮を景仰する祭典として創建以来齋行されている重要神事。

御神前には、梅花とともに七保会によって男性本厄年の四十二本と女性本厄年の三十三本の紅白梅の小枝で調製された「紙立」や、蒸した米を大小それぞれに調製した「大飯」「小飯」を供える特殊神饌「梅花御供」が今年も奉饌された。

祭典は七保会の宰領吉積徹氏の奉幣ノ儀で始まり、宮司が祝詞を奏上、続いて宮司、吉積氏、上七軒歌舞会会長の晴間進氏が玉串拝礼し、菅公の御遺徳を偲ぶとともにコロナ禍収束と日々の安寧を祈願した。

祭典には貞明皇后が行啓された古例に則り、今年も宮内庁京都事務所長が皇后



宮司祝詞奏上



奉幣ノ儀（七保会 吉積徹宰領）



献茶ノ儀（西廻廊）



玉申拝礼（上七軒歌舞会 晴間進会長）



末社御霊神社参拝

神社にお供えするお茶を点てる献茶ノ儀が執り行われた。芸舞妓らは、一人ひとりが梅花祭に想いを寄せた献句も例年しており、短冊が御神前に奉納された。（芸舞妓の献句作品は三十五頁に掲載）

またこの日は、宮司以下神職の冠に菜の花が挿され、梅花祭がかつて菜種御供と称されていた名残を現代に伝える祭典の姿も趣がある。

終日青空の広がる穏やかな天候となり、表参道を始め境内一帯には御縁日の露店が久々に多く立ち並び、梅花を愛でる参拝者も多数みられた。



御神前に供えられる「梅花御供」

陛下の御代拝として参向され、御神前に御拝礼をなされた。このように梅花祭の大きな特徴は、神社祭祀と皇室祭祀が一体となつて営まれ、三本の祝詞を奏上し、厳肅に執り行う祭典なのである。

また昨年に引き続き、祭典に先だち御本殿西廻廊で上七軒歌舞会の芸舞尚可寿さんと舞妓勝貴さんが、御本殿と末社豊国

梅花祭の協賛席である「梅花祭野点大茶湯」が、紅梅殿前の船出の庭で催された。昨年はコロナ禍によって中止となつており、二年ぶりの開催で、五分咲きの梅花の下、参加者は上七軒の芸舞妓のお手前による早春の一服を楽しんだ。

コロナ禍の影響に鑑み、開催が危ぶまれたが「梅花を愛でながらお茶を味わいたい」という崇敬者からの声も多かったため、開催時間を短縮し、参加者は全員マスク着用の上で人数を例年の三分の一程度に限定し、芸舞妓の奉仕はお点前のみにとどめるなど、感染対策に万全を期しての開催となった。

参加者は、芸舞妓が点てたお茶が運ばれてくると、マスクを外し、ゆっくりと一服を味わっていた。ある女性の参加者は「梅を愛でながら芸舞妓さんのお点前によるお茶を頂き、コロナで塞ぎ込んでいた気分が晴れてすっきりしました」と満足そうに語っていた。

二年ぶり野点大茶湯
人数を限定し、コロナ対策万全を期して開催



感染対策の中での茶会



見頃の梅花の中で催された野点大茶湯



上七軒の芸舞妓によるお点前

令和再興「雪月花の三庭苑」

当宮梅苑「花の庭」再興奉告祭並びに記念式典を挙
裏千家大宗匠 千玄室天満宮講社会長、清水寺 森清範貫主、妙満寺 大川日仰貫首らご列席



梅苑「花の庭」再興記念式典

江戸時代、京都洛中の名庭苑として名を馳せた「雪月花の三庭苑」のひとつ、「花の庭」が梅苑の整備に伴って完成し、一月二十六日、北野天満宮講社千玄室会長を始め清水寺森清範貫主、妙満寺大川日仰貫首らご列席の下、再興奉告祭並びに記念式典を斎行した。

「雪月花の三庭苑」とは、歌人・連歌師で貞門俳諧の祖である松永貞徳（一五七一〜一六五三）が作庭したとされる寺町二条の妙満寺（現在は左京区岩倉）の「雪の庭」、清水寺の「月の庭」、そして当宮の「花の庭」をいい、それぞれが成就院（成就坊）という塔頭に造られ、京洛の名庭苑として評判を呼んだといわれる。清水寺の「月の庭」は、そのまま成就院内にあり、また妙満寺の「雪の庭」も移転後は本坊の庭となつて現存するが、当宮の「花の庭」だけは、明治期の廃仏毀釈によって成就坊が廃寺となったことに伴い、庭も失われ、今日に至っている。

令和九年（二〇二七）に迎える式年大祭「菅公千二百二十五年半萬燈祭」の記念事業の一環で、この「花の庭」の再興を企図し、梅苑内に回遊式の枯山水庭苑を新設するなど整備を行い、本年約百五十年ぶりに再興した。

▼御本殿で梅苑「花の庭」再興奉告祭を斎行

この日、午前十時過ぎからは御本殿で関係者約三十名が参列する中、梅苑「花の庭」再興奉告祭を斎行。

再興を御神前に御奉告申し上げる祝詞奏上に続き、当宮崇敬会天満宮講社の千会長、森清水寺貫主、大川妙満寺貫首、田中誠二京都市観光連盟・京都市観光協会会長、宮司ら十人



当宮崇敬会を代表し千玄室会長による玉串拝礼



テープカット

が次々に玉串を執って拝礼し、御祭神に「花の庭」再興を奉祝する誠心が奉告された。

▼梅苑「花の庭」で厳粛に記念式典挙行

奉告祭後、引き続き再興なった梅苑「花の庭」の前に設営された舞台では華やかに記念式典が行われた。

先ず千会長が「この度、菅公千二百五十年半萬燈祭の記念事業の一つとして多くの方の賛同を得、洛中の『雪月花の三庭苑』の一つ、花の庭が梅苑改修によって再興することが出来ました。これから先、この三庭苑を未来永劫保存し、京都の大切な文化として後世に伝えていかなければなりません」と挨拶された。続いて、清水寺の森貫主が「花の庭が再興され、いよいよこの令和の御代に三庭苑が揃いました。松永貞徳先生もご満悦のことと思います」、また大川貫首も「清水寺の前に立ち東山の月を観、妙満寺の庭から比叡の雪を眺め、北野の神域で梅花の観賞を」と、それぞれ挨拶された。引き続き来賓の方々の紹介があり、門川大作京都市市長らの挨拶の後、テープカットが行われた。

次に奉祝行事に移り、当宮とは馴染み深い朗詠と白拍子の舞が行われた。今回は、この「雪月花の三庭苑」再興にあわせて特別に制作された演目で、雪月花の言葉の由来となった中国・白居易の漢詩の一節が朗詠され、それにあわせて白拍子の舞を披露、次いで松永貞徳作の俳句が催馬楽（平安時代に隆盛した歌謡）の節回しでも舞われ、最後は菅公御歌「東風吹かば…」の歌にのせて白拍子の歌舞が行われ、参列者を雅の世界に誘った。さらに上七軒歌舞会による祝舞も、この日にあわせた新しい演目の舞踊を芸舞妓らが華やかに披露し、「花の庭」再興を盛り上げた。

西脇隆俊京都市知事の挨拶の後、宮司が「念願であった雪月花の三庭苑のひとつ、花の庭の再興を関係各位の皆様のご臨席の元、このように披露することが出来ました。コロナ禍の中、ご臨席頂いた皆様に心より感謝を申し上げたく存じます。この疫病の一日も早い収束を祈念するとともに、この三庭苑再興が京都の文化観光の一助になることを願って止みま



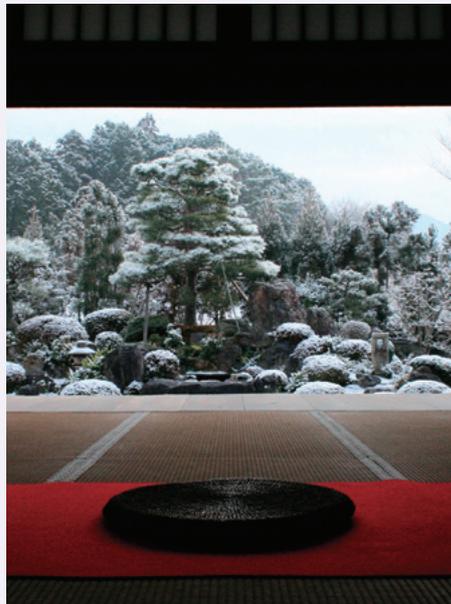
妙満寺 大川日仰貫首ご挨拶



清水寺 森清範貫主ご挨拶



裏千家大宗匠 天満宮講社 千玄室会長ご挨拶



約150年ぶりに雪月花の三庭苑が揃う

せん」と結びの言葉述べ、記念式典を締めくくった。
 なお、今後、この令和再興「雪月花の三庭苑」は、当宮の梅苑「花の庭」公開（一月二十八日～三月下旬）、清水寺「月の庭」公開（四月二十九日～五月五日）とリレー形式で特別公開する予定。さらに三社寺で奉製した「雪月花の三庭苑」再興特別記念切り絵もそれぞれの社寺で頒布し、京都への観光誘致や各社寺の参拝へ繋げていく予定である。

「雪の庭」改修工事完了
当宮神職も参列し妙満寺で
令和の改修円成奉告法要

「雪月花の三庭苑」の一つ、京都市左京区の顕本法華宗総本山妙満寺の「雪の庭」の改修工事が終わり三月十七日午前十一時から同寺本堂で奉告法要が営まれた。
 法要は同寺の大川日仰貫首が導師となつて営まれ、当宮神職や清水寺僧侶も参列、「雪の庭」の改修工事完了を祝った。
 同寺は寺町二条にあつたが、約五十年前、塔頭にあつた「雪の庭」ともども現在地に移転した。今年に入って樹木の整備や排水などの改修工事が行われ、比叡山を借景とした見事な庭が蘇った。
 翌十八日から特別拝観が始まり、五月八日まで行なわれる。



改修整った雪の庭



「雪の庭」奉告法要



上七軒歌舞会による祝舞



朗詠・白拍子の舞

北野天満宮
×
長浜観光協会

第一回「北野盆梅展」開催



文道会館1階展示会場

梅苑「花の庭」公開にあわせ、今年初めての試みとして、滋賀県の長浜観光協会（岸本一郎会長）が出席協力し、京都市観光協会（田中誠二会長）後援のもと、第一回「北野盆梅展」を一月二十八日から二月十三日まで文道会館で開催した。

長浜観光協会で毎年開催されている長浜盆梅展は、昭和二十七年（一九五二）に始まり、今年で七十一回を数える歴史・規模ともに日本一といわれる盆梅展。長浜観光協会が管理する梅は、鉢植えを含め約二千本。高さが三メートル近い巨木や樹齢四百年を超える古木など、約三百鉢の盆梅を保有している。

今回開催した「北野盆梅展」は、長浜観光協会との長年のご縁により、当宮の梅苑開苑時期にあわせて開催すること、京都市と長浜市両市の観光をさらに発展させ、北野の梅の信仰をより広く発信していきたいとの強い想いのもとに実現させたもの。開催にあたり、会場の規模や開花時期などを考えながら、選りすぐりの盆梅十五鉢を展覧した。

今年は例年に比べて年明けより寒い日が続き、一月下旬から二月上旬の梅苑はようやく早く咲きの梅がちらほら咲き始めた状況であったが、当宮では初開催の盆梅展ということ、初日より多くの観梅者が訪れ、蕾を膨らませ花を咲かせた盆梅一鉢一鉢を興味深く観ながら、一足早い春の訪れを感じていた。



咲き誇る盆梅



苑「花の庭」公開



紅梅・白梅、梅の香馥郁^{ふくいく}
コロナ禍の心の癒し求め、観梅者で賑わう



展望台より見渡す梅苑「花の庭」

再興された梅苑「花の庭」の公開が、一月二十八日から三月二十一日まで行われた。二月が寒かったこともあって梅の開花が予想より遅れ、閉苑日を当初の予定より一週間程度延長した。コロナのまん延防止期間中だったにも関わらず、二月下旬ごろから「コロナ禍でふさぎ込んだ気持ちに美しい梅花を愛でて癒されたい」とするマスク姿の観梅の参拝者で賑わった。梅花をこよなく愛された御祭神の菅原道真公（菅公）を祀る当宮は、梅苑を中心に約五十種・千五百本もの梅の木があり、京都市内でもっとも著名な梅の名所となっている。今年は「雪月花の三庭苑」の一つ、「花の庭」が梅苑整備によって約百五十年ぶりに再興されたことがテレビや新聞で大きく報道されたこともあり、「菅公の御心が宿る『花の庭』で美しい紅梅や白梅を愛でたい」とする観梅者が多かった。

再興の「花の庭」

回遊式の広い苑路

苑内が一望できる展望台

ともに好評

「花の庭」再興は、五年後に迎える式年大祭「菅公千百二十五年半萬燈祭」の記念事業の一環で、従来あった梅苑を整備したもののだが、とくに北側に新設した回遊式の庭園は目玉の一つ。苑路を比較的広くとっており、観梅者同士の接触を避けることに繋がり、絶好のコロナウイルス対策ともなったため「心配せずにゆつくり散策でき、観梅を楽しむことが出来た」と好評。また、梅苑南側に新設した総檜の展望台も評判がよく「梅苑が一望でき、上からたくさんさんの梅の花を見渡すことが出来、楽しかった」という声も聞かれた。

梅の咲き具合は表参道からもわかるため、満開が近づくにつれ馥郁^{ふくいく}とした梅の香に誘われるように参拝者が増え、スマートフォンをかざして梅花を撮影したり、親子連れ、仲間同士などで記念撮影する組があちこちで見られた。

梅 宿る心御の公菅



品種 思いのまま

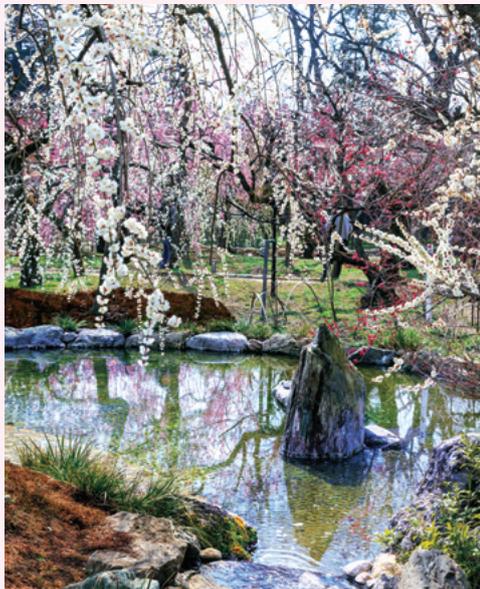


国宝御本殿、三光門と「花の庭」の賑わい



ろうそくとLEDの光が灯された「花の庭」

コロナ禍ではあったが、「密集せずに観梅出来た」「十分に気分転換になった」「これだけゆったりと散策できれば、コロナの危険性はないと思う」などと感想を述べる人もあった。さらには、「梅苑が整備されたためなのか、気のせいかな、今年の梅は例年よりきれいに感じた」という人もあった。



新設された州浜

「密集せずに観梅できた」「コロナ禍の気分転換になった」
「例年よりきれいに感じた」 入苑者の感想も上々

さらに同十日には、NHKと読売テレビが満開の梅苑をテレビ中継したため、その後の入苑者が大幅に増えた。また、毎日テレビも十四日、『THE TIME』の番組中に梅苑を生中継で紹介した。

梅苑内に植えられていた御本殿前の御神木の飛梅を、組織培養によって増殖させた苗木が初開花したというニュースが三月四、五両日のテレビや新聞を賑わせた。「どれが開花した飛梅の苗木ですか？」と、通りがかりの神職へ尋ねる入苑者もあり、飛梅の苗木の周辺に撮影する人たちが人だかりがでる場面もあった。

テレビ中継相次ぐ
開花した飛梅の苗木も話題に

二月二十五日からは、毎週末（金・土・日）のライトアップも始まった。ガラスハンギングボールの中に入った約八百のろうそくの灯りとLEDライトが梅苑内を淡く照らし、幻想的な雰囲気の中、観梅が入苑された人たちを楽しませた。

幻想的な雰囲気
のライトアップ
約八百のろうそくの灯り
梅苑照らす

好天の下、春の「曲水の宴」催す コロナ禍、鑑賞者は招待者のみに限定



梅花のもと曲水の宴斎行

春の曲水の宴を三月五日、紅梅殿船出の庭で催した。未だ収まらないコロナ禍中とあり、今回も前回同様入場は招待者のみ、奉仕の詠者は二組、童子も三名のみと開催規模を大幅に縮小し、コロナ対策に万全を期した形式での開催となったが、天候もよく、梅花の下での「平安の雅」の再現が参会者を魅了した。

宴は、曲水の宴菅公顕彰委員を代表して上冷泉家当主冷泉為人氏、冷泉貴実子氏ご参列のもと有斐斎弘道館館長の濱崎加奈子氏の司会によって進められ、まず紅梅殿上で菅公作の漢詩『花時天似醉』が、雅楽の音に合わせて朗詠され、白拍子が菅公御歌を詠じながら優雅に舞った。

この後、「曲水流觴」となり、平安装束に身を包んだ漢詩を詠む詩人（男性）と和歌を詠む歌人（女性）が一組となって小川沿いに座り、流れてきた杯を口に当て、「神」と「梅」の兼題によって漢詩と和歌を色紙に筆でしたためた。

この日の詩人は植山俊宏、藤村竜雅両氏。また歌人は井口香苗、板垣華蓮両氏。したためられた作品は、それぞれ各人によって披露され、解説が加えられた。

「和魂漢才」の精神に基づく当宮の曲水

今回で十一回目を数える当宮の『曲水の宴』は、平成二十八年秋に千有余年ぶりに再興した行事。学問・文化・芸能の神として信仰される菅公が平安時代、その高い文才を評価され、幾度も宇多天皇主宰の曲水の宴に文人として招かれていた。そこで菅

公は、自身が提唱した「和魂漢才」の精神、つまり日本古来の心と伝来の新しい文化や学問、技術を広く受け入れ、その両方を兼ね備える柔軟さと寛容さの必要性を説いたと伝わる。そのような菅公精神に学び、当宮の曲水の宴は和歌だけでなく漢詩を賦す「和漢朗詠」形式で、『和漢朗詠集』に採られた菅公御詩を白拍子の舞と朗詠にて披露する全国でも類を見ない北野ならではの形式にて執り行い、菅公の御遺徳を偲びつつ、毎年春と秋の二回催している。



白拍子（白拍子研究所）



童子（島田 迪さん）



童子（岡部 真子さん）



童子（森 清観さん）

曲水の宴で披露された漢詩と和歌

一番 神

詩人 植山 俊宏（京都教育大学副学長）

神
植山俊宏
梅花黄鳥不勝情
春氣弥天滿洛城
借問東君何処有
已辞佐保入西京

梅花黄鳥不勝情 梅花黄鳥情に勝へず
春氣弥天滿洛城 春氣天に弥りて洛城に滿つ
借問東君何処有 借問す東君何れの処にか有ると
已辞佐保入西京 已に佐保を辞して西京に入る

梅の花が咲きウグイスが鳴くと、こみあげる感情をおさえられない。春の気は天にみなぎり、この京都の地に満ちている。

ちよつとお尋ねしたい、春をつかさどる神（佐保姫）はどこにいるのかと。その神ならずで佐保山に別れを告げて京都に入ってきている。

* 古都京都への春のおとづれを喜び寿ぐ気持ちを、春の女神とされる佐保姫が京都に訪れたという詩的な表現で表した漢詩。

歌人 井口 香苗（やわた走井餅老舗）

神
あしひきの神のまします 山仰ぎ人の浮き世を見守ると知る

「あしひきの神のまします 山仰ぎ人の浮き世を見守ると知る」
* 石清水八幡宮の門前で山を見上げつつ育った歌人が、疫病や争い、日々の悩みなど人は惑っているにもかかわらず、神はいつもそこにいて人の世を見守ってくださっているという感慨を詠んだ歌



朗詠（藤村正則氏・京都雅楽会）



詠者（藤村竜雅氏・板垣華蓮氏）



詠者（植山俊宏氏・井口香苗氏）

二番 梅

詩人 藤村 竜雅（京都教育大学四年生）

梅
藤村竜雅
春光寂寞断人腸
風起紅梅點暗香
峯首望星千里靜
晦冥遠見月如霜

春のけしきはもの寂しく私のほらわたしはちぎれそうだ。そこへ風が吹き起つて紅梅の香りがただよってくる。頭をあげて星を眺めると千里にわたつて静まりかえり、暗闇の中、霜のような白い月光がはるか遠くに見える。

* 春の夜に漠然とした孤独の中で見た梅の鮮烈な印象を詠んだ若者らしい感性をたたえた漢詩。

歌人 板垣 華蓮（同志社女子大学 修士二年生）

梅
今年また 匂ひ初めたる 梅の花に 遠き願ひを おもほゆるかも

「今年また 匂ひ初めたる 梅の花に 遠き願ひを おもほゆるかも」
* 北野天満宮で梅が咲き始めるのを見ると、昔公が「東風吹かば」と主がいなくなつても花を咲かせ香りを届けて欲しいと願つたことが思い起こされると詠んだ和歌。



「飛梅」



菅公が育まれた紅梅を受け継ぐ唯一の「飛梅」

組織培養苗木が世界初開花 住友林業の技術実り、未来へ繋ぐ一筋の光

梅苑「花の庭」で、御本殿前に植えられている御神木の飛梅を組織培養によって増殖させた梅の苗木が蕾を膨らませ、三月四日に初開花した。

住友林業筑波研究所（茨城県）が組織培養に着手してから七年目の快挙で、老木である御神木の行く末が憂慮されていた当宮にとつては、御祭神の愛でられた紅梅（飛梅）を後世に守り受け継いでいく上で大きな朗報となった。

「飛梅」とは平安時代、菅公ご邸宅「紅梅殿」で育てられた唯一の紅梅

菅公薨去後、当宮創建とともに御神前に植えられる

菅公は梅花をこよなく愛され、平安時代、自身が住まわれた邸宅紅梅殿の庭には、丹精込めてお育てになられた紅梅が植えられていた。

当宮所蔵の国宝『北野天神縁起絵巻』（承久本）の巻三に描かれる、菅公が遠く九州大宰府の地へ旅立たれる折に、懐かしさの余り自庭の紅梅に契りの和歌をお詠みになられるお話はあまりにも有名で、この紅梅こそ、やがて「飛梅」として語り継がれる梅であり、菅公薨去後、当宮が創建されるにあたり、紅梅殿より当宮境内に移植された唯一の「飛梅」と伝えられている。

当宮古記録に見る「飛梅」の記録

御本殿前の御神木「飛梅」については、当宮所蔵の『宮仕記録』の寛政五年（一七九三）十一月二十五日の条に「庭上（御本殿前）に植えられている梅の木は飛梅の種に間違いない、この梅の前に（飛梅木）と記した石碑を建てるかどうか」といった京都西町奉行所との間のやり取りが記載されている。少なくともこの当時には、当宮の御神前の梅を「飛梅」として万民が広く認識していたことがわかり、特別な梅として捉えられていたことが伺える。さらに当宮に遺される古記録には、延喜七年（九〇七）に京の都より「紅梅」が遠く九州に飛来したという記録も遺る。飛梅伝説は全国各地に数多く伝わり、それぞれの地域特有の信仰と相まって語り継がれているが、いずれにしても総本社である当宮では、創建以来御神前の紅梅が、菅公が育てられた紅梅を受け継ぐ唯一の梅として伝えられているのである。

千年の時を超え、令和に受け継ぐ「飛梅」

一般的に梅の樹齢は百年から二百年といわれているが、当宮の御本殿前に植わる飛梅は、幹回りの太さなどから推定樹齢は三百五十年から四百年とされ、同研究所が下部（根）と上部（枝）のDNAを調べた結果、それぞれ異なる遺伝子を持つことから、接ぎ木によってその種を絶やさないように、代々守られてきた唯一の「飛梅」であることがわかった。



国宝『北野天神縁起絵巻』承久本〈巻三〉紅梅殿にて自庭の紅梅と別離の場面



国宝御本殿と飛梅



世界で初めて開花した組織培養による飛梅の苗木



世界初となる苗木増殖の成功より二年後の平成二十九年三月、一メートル以上に大きく育った苗木三本が当宮境内に無事里帰り。
 この間も住友林業ではDNA検査などの研究がすすめられ、現在の御神前の「飛梅」は、少なくとも江戸時代前期の四百年近く前には接ぎ木をされていたことが判明。同年三月九日の記者発表では、さらに歴史は遡り、創建以来接ぎ木によって代々「飛梅」が守り継がれてきたことを報告。
 先人たちが「飛梅」を絶やさないためにあらゆる手段を講じながら守り抜いてきた歴史を改めて科学的に証明した。

組織培養で育った苗木が当宮に里帰り／平成二十九年三月九日

菅公が育てられて以来、北野で守られてきた「飛梅」代々接ぎ木で継承され現在に至ることが判明

組織培養による梅の苗木の増殖を住友林業株式会社と共同で着手。平成二十七年、世界で初めて苗木誕生に成功。記者発表し、改めて菅公お育ての紅梅の種を受け継ぐ国内唯一の「飛梅」として国内外に広く発信した。

「飛梅」組織培養による苗木増殖に成功／平成二十七年三月四日

——「飛梅を未来に」これまでの歩み——

近年、梅を脅かすウイルスが猛威をふるい、感染による甚大な被害が報告される中、当宮では御神木をいかにして守り継いでいくかが喫緊の課題となっていた。さらに木の老化により花色が徐々に薄くなるなどの現象も危惧され、従来の挿し木や接ぎ木による苗木の育苗ではなく、開発された最新技術で幼若化を図り、無菌状態から苗木を誕生させる組織培養技術により、ウイルスにも強く安定した増殖の道を選択することになった。
 十年前、同研究所の研究員が御神木の梅から材料（冬芽）を採取し、培養液づくりの失敗を繰り返しながら三年後の平成二十七年、世界で初めて梅の組織培養による増殖に成功。二年後の平成二十九年に高さ五十センチ程度になった苗木三本が当宮に里帰りし、梅苑内に植えて育てていた。昨年にはさらに二本が里帰りを果たし、合計五本の苗木が苑内に戻された。
 今回初めて開花した苗木は、高さ三メートルに育った梅で、次々に蕾を膨らませ紅色の花を咲かせた。
 住友林業株式会社によると「実梅が組織培養によって花をつけた例は幾つか報告されているが、花梅での実例報告はなく、とくに今回のような古木が組織培養で花が咲いたのは世界で初めての報告になる」という。
 当宮では先のDNA鑑定の結果を受け、接ぎ木によって創建以来受け継がれてきた飛梅を、現代の新しい技術によってさらに未来永劫守り継いでいくための一筋の光明となる大きな意味を持つ開花となった。



大きく成長し花を咲かせた飛梅 (令和4年3月)



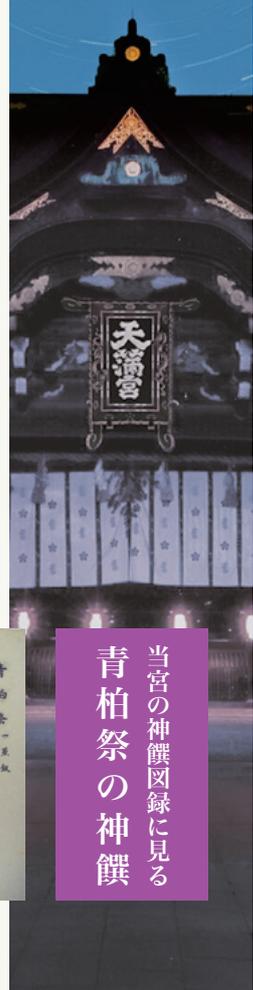
里帰りした飛梅の苗木 (平成29年3月)



飛梅 組織培養による苗木誕生 (平成27年3月)

北野の神事 古代信仰と宮中祭祀の祭典「青柏祭」

あおかしわさい



当宮の神饌図録に見る
青柏祭の神饌



青柏祭神饌

例年六月十日に斎行する当宮初夏の祭典「青柏祭」。

古来、当宮では立春の霞祭、初夏の青柏祭、立秋の御手洗祭、立冬の赤柏祭を「北野の四季祭」と称し、祓えと浄めの信仰に基づき、日々の神恩感謝と、季節の変わり目に際し無病息災・身体健康が祈願されてきた。

その中でも青柏祭について当宮史料によれば「往古より祭式あり、新芽の葉を神供に穀を奉る夏季報賽の祭」と記し、その起源は遙か古代に遡ると伝えられている。

瑞々しい柏の葉を御神供に用いるのは、古代より柏の葉は神への供物に添える神聖な慶祝木としての意味をもち、他木と異なり、落葉することなく枯葉がそのまま枝に残り、新春に新しい葉と入れ替わる様から、延命長寿や子孫繁栄に繋がる縁起物と信仰されてきた理由が大きい。

当宮の青柏祭における大きな特徴の一つは、その柏の葉を用いた特殊神饌である（表紙写真参考）。青葉の中に炊いた御飯を入れて包み、クルミとともに御神前に供えるこの特殊神饌は、全国的にも珍しい形状といえる神饌であろう。

当宮に遺る神饌図録によれば、かつての青柏祭は、現行の青柏の御飯の上にさらに小豆を盛った「小豆飯」にして柏葉で包んでいたことが記されている。小豆には邪気災厄を祓う利益があることから、当宮の青柏神饌には、厄除けの信仰が包含されていることが理解できる。

さらに図録を繙くと、青柏祭には柏の葉を下に敷いた「神餅」の神饌が供えられていたことがわかる。「神餅の団子餅は日月星ならん」と表記されたこの特殊神饌は、丸型と円形型とひし形の三つの形状をした餅で、それぞれ「丸型が日」「円形型が月」「ひし形が星」を表しているという。これは、平安京の天門に位置し、北極星をいただく北野の地に古伝する三辰信仰にも通ずるが、さらに興味深いことは、江戸時代の儒学者、志賀理齋編纂の『理齋隨筆』に「正月の餅を鏡といふは、日月を表したる。禁中の餅は…（省略）、また「ひし」といふは「星」と云う事なり」とあることからわかるように、当宮の青柏祭で神供として調製された餅の形状は、禁中（宮中）で用いられていた神供が当宮に伝えられたものであるということである。

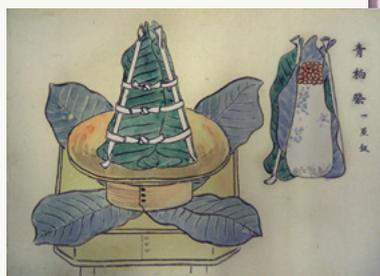
畏くも皇室と深い御縁で結ばれてきた当宮で、宮中祭祀の一端と古代信仰の名残が見られる貴重な神事が「青柏祭」なのである。



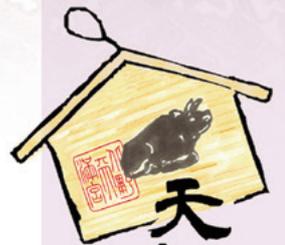
胡桃のお供え



宮中祭祀の神供に似た
日月星の姿を表す神餅御供



蒸飯上に小豆を盛り
柏の葉で包む



天神さまと私

学校法人作新学院理事長

畑 恵さん



今号は、菅公を敬われ、当宮にもよく参拝されておられる作新学院理事長の畑恵さんをお迎えし宮司との対談となりました。
(構成・編集部)

畑 道真公について歴史の授業で習いはしますが、残念ながら正しく理解されていない気がします。高名な歌人であり右大臣まで上り詰めた政治家が、讒言によって左遷され亡くなり、その後怨霊となるが、やがて天神様として崇められる。どうして怖い怨霊が人々を守る神様になるのと、子どもたちは素朴な疑問を持ちます。

宮司 なるほど、なるほど。

畑 間違っているかもしれませんが、私は自分なりの解釈でこう説明しています。「怨霊」だと恐れおののいたのは人間の方で、菅公は最初から神だったのだと。神様のように素晴らしい業績と人柄だった道真公を、あんな酷い目に遭わせてしまった。そんな道理に背いた

宮司 本年は春の訪れが遅かった分、梅風祭の今日になっても名残の梅花のお迎えができて何よりでした。

畑 まさに神日和という晴天のもと、愛らしい紅梅に囲まれての御昇殿参拝となり感激いたしました。貴宮から御寄贈いただいた御神梅も、寒風にめげず今年もお正月から美しく咲いてくれました。

宮司 随分と冷え込む日が続いたと思いますが、それでも咲きましたか。

畑 はい。どんなに寒さが厳しい年でも、「寒紅梅」は必ず年明けにはほころんで受験生を励ましてくれます。御神木をお迎えて以来、本学では競泳の萩野公介選手など卒業生が、リオ五輪や東京パラリンピックで次々とメダルに恵まれ、東大・京大への合格も叶いまして有り難い限りです。

宮司 寄贈を機とされ、菅公に関する講演を貴学でされたそうですね。

畑 講演と言えるほどの内容ではないのですが、菅公について子どもたちや保護者の方に少しでも理解してもらいたいと思ひまして。

宮司 資料を拝見しましたが、相当に立派な作品ですよ。菅公は白居易（白樂天）の再来か、といえるほどの詩人ですが、それにも触れられており感動します。

ことをすれば、ただではすまない。いつかきつと天罰が下るに違いない。そんな”良心にもとづいた畏れ“のようなものが、当時の人々の心には存在していたのだと思います。だから、天災も病気もすべて菅公の為せる技に思えた。つまり、菅公が怨霊から天神に変わったのではなく、変わったのは人々の心、人々の見方だったのだと思います。最初は体制に疎んじられた菅公ですから、怨霊というネガティブな存在として描かれましたが、時を経て素直な心で見直せば、菅公は紛れもなく悪を滅ぼし善を守る天神さまだった。そう子どもたちに説明しています。



「作新」の名は中国の古典『大学』から



畑 創立百三十七年を迎える本学で

すが、校名の「作新」は中国の古典『大学』（四書五経の一つ）の一節から勝海舟によって名付けられました。世の中の変化に対応できるよう常に学び、自らを新たにしていって、未来を己の手で切り拓ける人財を育成することが、「作新」の使命です。今どきの言葉で表現すれば「イノベーション」、つまり、新たな価値の創造“を起こせる人間。常識の枠を打ち破り、前人未到の領域へ挑戦する人になってほしいと願っています。そのためにも、文武両道に加え社会貢献が校是です。いくら文武で成果を上げて、世の中を良くするという行動に結びつかねば意味がないと思っています。

宮司 お話を聞いていて学院の本質を垣間見る思いがしました。華やかなテレビのキャスターから国会議員、教育者という道を辿られました。その原動力は何ですか。

畑 物心ついた時から、道理に合わないことに強い違和感を感じる子どもでした。理屈っぽく可愛げのない子だったと思いますが、そのまま大人になり、芸術番組の制作を希望してNHKを受験しました。ところが、どういうわけかアナウンス室に配属され、ニュースキャスターという仕事を与えられました。お蔭で貴重な経験と多くのご縁を頂戴しましたが、やはり芸術・文化に関わる仕事がしたくてパリに留学し、文化政策を学びました。ある時、羽田孜首相（当時）へ文化予算の増額について陳情したところ、「君の気持ちはよく分かるが、文化なんて金にも票にもならないから、誰もやらんよ。それなら自分でやったら」と言われまして。人に頼んでおきながら、自分でやるのは御免、というのでは道理に合わないと思ひ、政界に飛び込むことになってしまいました。教育に携わるようになって

たのは、夫の家業だったからですが、どの仕事も一貫して“青臭い正義感”に突き動かされている気はしています。

宮司 ところで、当宮とのご縁のきっかけは？

畑 実はそれが自分でもよく分からないのです。京都はもとと大好きでよく訪れていたのですが、なぜ御昇殿参拝させていただけるほど足繁く参拝するようになったのか、理由や理屈がまったく思い当たらないのです。天神さまに“呼んでいただいた”と言いますか。ただ、参拝すると必ず御褒美のように学院に吉報がもたらされたり、ノーベル賞受賞者の方々とのご縁が深まったり、それでもまた御礼詣りに伺つてと、好循環が生まれています。

宮司 ありがとうございます。今、コロナ禍で足が少し遠のいていますが、当宮には毎年、おびただしい数の修学旅行生が訪れます。御本殿に昇殿参拝していく修学旅行生の多いのも特徴です。そうした若者に対して先生からのメッセージをお願いします。

——つつがなく日々がおくられていることに感謝を

畑 コロナ禍やウクライナへの軍事侵攻など試練の多い昨今ですが、試練は決して不幸ではなく、むしろそれは大神様からの愛なのだ、私はいつも子どもたちと話しています。得るばかりが幸せではありません。健康でも平和でも、失つて初めてその価値の大きさに気づくことができる。そういう意味で、つつがない日々を過ごせることの偉大さに気づけた私たちは幸せなのだと思います。日々のすべてに感謝して生きることができれば、幸せな人生を送れると思っています。**宮司** いろいろ示唆に富んだお話しをして頂き、ありがとうございます。

畑 恵（はた・けい）氏略歴

早稲田大学第一文学部卒。お茶の水女子大学大学院後期博士課程修了、学術博士（科学技術政策）。一九八四年NHK入局。「夜7時のニュース」を最年少で担当するなど報道、情報番組のキャスターを担当。八九年NHK退局。テレビ朝日系「サンデープロジェクト」など報道番組を担当。九二年EBC（現E.U.）の招聘を機に、パリ留学。『ESMC（文化高等経営学院）』で文化政策・文化マネジメントを履修。一九九五年参議院選挙に立候補、初当選（一〇二）。一九九九年作新学院副院長、二〇〇八年理事長就任、現在に至る。

平安京 天門・ 北野天満宮と 土蜘蛛伝説



鼎談の様子（山本壯太氏、宮司、金剛永謹氏）

土蜘蛛伝説の原点は 平安京の北西「天門」に鎮座する北野天満宮の「祓いと浄めの信仰」

平安時代、魍魅魍魎がはびこる都で、清和源氏三代目源頼光の鬼退治に語られる「蜘蛛塚」や名刀「髭切膝丸」については、すでに多くの伝説や逸話が伝えられている。



渡邊綱石燈籠

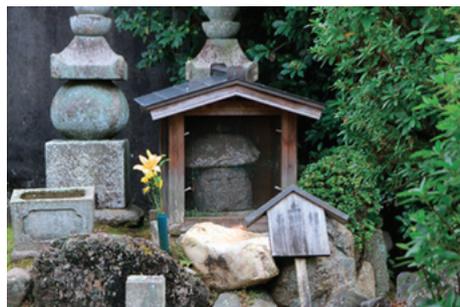
中でも当宮所蔵の名刀「鬼切丸（髭切）」と兄弟刀である大覚寺所蔵の名刀「薄緑（膝丸）」を所持していた平安時代の名将・源頼光世にいう頼光（らいこう）が、自身の枕元に現れた法師を太刀（膝丸）で追い払い、北野の杜で頼光と頼光四天王とで正体を現した「土蜘蛛」を退治する「土蜘蛛伝説」は有名で、その後、北野境内に鎮魂の為蜘蛛塚の石塔が建てられたという話は、広く人口に知られている。その石塔は現在も当宮南方の東向観音寺に姿を遺し、歴史・刀剣ファンの知るところとなっている。

ここで重要なことは、蜘蛛切伝説しかり幾多の鬼切伝説の舞台がここ北野天満宮であり、北野は帝の住まう「御所の北西」、つまり「天門」の方位に位置しているということである。

天門の方位である北野の地は、平安京遷都以来、京にはびこる鬼どもや魍魅魍魎を祓い浄めて鎮める聖地であり、祭りの斎場という重要な役割を担ってきた場所であった。五穀豊穰祭・北野雷公祭・渡航安全祭などの神事に加え、御霊信仰からなる疫病退散や厄除、鎮魂と祓えの祈りが捧げられてきた場所であった。

このような信仰が根付いていたからこそ、「土蜘蛛伝説」の舞台や渡邊綱による鬼切伝説は北野が舞台となつて、信仰的に語り継がれてきたのである。

「蜘蛛塚」「鬼切丸」「蜘蛛切」……これらの伝説の根幹には、荒ぶる怨霊であった菅公の御霊を鎮め祀られた「天門北野」だからこそ生まれる信仰的なお話だという事をまずおさえておきたい。



東向観音寺 蜘蛛塚

文化庁アートキャラバン 『土蜘蛛千筋之伝』公演 金剛能楽堂で金剛流二十六世宗家、宮司ら鼎談

文化庁アートキャラバン事業による能『土蜘蛛千筋之伝』の公演が昨年十二月二十六日、金剛能楽堂（京都市



能「土蜘蛛 千筋之伝」 金剛宗家の創案「蜘蛛の巣」

上京区)で行われた。開演に先立ち「北野天満宮と土蜘蛛伝説」と題し金剛流二十六世宗家金剛永謹氏、古典の日推進委員会ゼネラルプロデューサー山本壯太氏、橋重十九当宮宮司による鼎談が行われた。

まず山本氏が、月一回京都に縁の深い演目で上演されている金剛流京都能楽紀行は『金輪』、『田村』に続き、三回目の今回は切能の『土蜘蛛』だとし、「千筋の伝という小書きもある華やかな作品で、真っ白な蜘蛛の糸が能楽堂一杯に飛ぶ。切能の説明を」と切り出した。

金剛宗家は「能は江戸時代になり五番だけで上演するのが正式と決まった。五種類に分けられ、神さまの能から始まり、男の能、女の能……と続き、本日は五番目の能だ。ここで切をつけるという意味だ」と、切能の呼び名の説明を行った。そして、『大江山』『羅生門』といった鬼退治の能がたくさんあり、きょうの『土蜘蛛』も大変人気がある」とし、葛城山に棲む土蜘蛛の精が源頼光の寝室を襲うが、逆にやられてしまう、という簡単な筋立ての説明を行った。

また、山本氏が「普通は討つ方がシテだが、異界もの“では討たれる方、土蜘蛛とか鬼がシテ役になるというのも面白い」と感想を述べた。金剛宗家は「能では滅びの美学があり、討たれる方を主人公とするものが結構多い。『土蜘蛛』も政権に従わない一族を退治した話だと思う。そうした人々を主人公にするのは、祟りを恐れた、ということもあると思う」との見方を話した。

山本氏が「土蜘蛛も様々な鬼たちも朝廷に従わない各地の土豪だったという風に考えれば見方が深くなる」とし、「北野天満宮は、菅原道真公(菅公)を祀る神社。大宰府に左遷され、一度は鬼になった人が学問の神として信仰されるようになった経緯は」と問い掛けた。

宮司は「天神信仰には怨霊面と学問面の二面がある」とし、「菅公は、政治家ながら類まれなる学者・教育者・詩人でもあった。それ故に政敵藤原時平一族の恨みをかい、冤罪により大宰府に左遷、失意のうちの薨去だった。が、清涼殿に落雷があり政権中枢の公卿らが死に、時平も若くして死ぬなど不幸が続く。菅公崇り説が流布し『日本紀略』も「菅公の怨霊」と記す。そこで怨霊を慰めるべく都の天門・北野に祀った。一度は怨霊神となったが、冤罪は明白であり、朝廷は一條天皇の永延元年(九八七)“天満自在天神”の神号を贈った」と、怨霊神が学問の神に変わった経緯を話し、「現在全国に八万社の神社があるが、うち一万二千社が天神さんである」と述べた。さらに、土蜘蛛を斬った膝丸は蜘蛛切の別名が付き現在大覚寺にあり、その兄弟刀である髭切は、源頼光の四天王の筆頭、渡邊綱が鬼を斬った伝説から鬼切丸の別名が付き当宮に所蔵。渡邊綱奉納の石燈籠(国の重要美術品)は御本殿前の中庭にあるが、土蜘蛛の供養塔は隣の東向観音寺内に遷された、と紹介。「北野の地は京にはびこる鬼や魍魎魍魎を鎮める場所だった。頼光の蜘蛛切や渡邊綱の鬼切の伝説もそこに依拠していると思う。現在も節分には鬼を追い込む所として信仰(四方詣り)されている」とし、「能”雷電“でも怨霊神が天神という人々から崇められる存在になっていくが、そこに至る重要な一部分として土蜘蛛伝説があると思う」と述べた。

最後に金剛宗家が、華やかな蜘蛛の巣は、江戸期から明治時代にかけて活躍した金剛流二十一世の金剛唯一という人の創案であるとし、蜘蛛の巣づくりの苦労話を紹介して公演に入った。

北野聖廟法楽二

―北野連歌会所と北野学堂―

北野文化研究所 室長 松原 史

はじめに

北野天満宮社報29号において、宮中における法楽和歌、当宮に残された法楽和歌連歌、歌神としても崇敬された御祭神菅原道真公（菅公）と連歌の関係を概観し、社報30号では、当宮の梅苑「花の庭」の由来となった歌人で俳諧の祖と称される松永貞徳と北野の連歌、その時代に関して概説した。

当宮の歴史を繙くと、日本の文学・歴史上において「連歌」というものが、我々が今日思う以上に重要視されてきたこと、神事と連歌とが切ってもきれぬ関係性にあつたこと、詩歌・連歌・文学をして神を慰め、国を治めんとする法楽という行為が広く永く行われてきたことを改めて実感する。

今号では、詩歌・連歌の神である菅公をお祀りする北野における連歌の諸相に関して、詳しくみていきたい。

神事と一体化した北野の連歌興行

平安朝に藤原氏と朝廷により御霊神として祀られた御祭神菅原道真公が、次第に詩歌の神、連歌の神として崇められるに至る中世。宮中における北野法楽和歌はもとより、室町幕府の隆盛とともに、武士の文学として連歌が新たに発展していった。

当時、連歌を奉納することは菅公に祈ることと同義であり、近世に至るまで、しばしば境内で行う連歌興行の伝統は続いていく。北野天満宮で五十年ごとに行われてきた式年大祭（萬燈祭）では、有志による連歌を奉納するのが慣いであり、また松梅院主催で毎年正月三日に当代一流の連歌師らによって裏白連歌という連歌興行が行われるのが慣例であつた。松梅院とは、北野天満宮の神事奉行をつとめた祠宮家の筆頭であり、僧形の神職である宮仕とともに祭礼、社務をつかさどつていた。北野天満宮においては連歌を賦することがすなわち神に仕えること、連歌＝神事であり、それゆえに連歌は宮仕の必修科目であつた。宮仕の中には、能順のように連歌の名手として知られて法橋に叙され、靈元天皇が召して連歌の評価をさせたり、松尾芭蕉が慕つてわざわざ訪ねてくるような者も出た。

連歌懐紙 ― 連歌は神威発揚・祈願成就に通ず

また連歌の重要性を表す例として、連歌懐紙の存在が挙げられる。菅野扶美が指摘するように、御祭神をお祀りする御本殿の内陣にも、連歌懐紙が御神宝として納められていた。（菅野扶美「空間から見る北野天神信仰の特徴」『変貌する北野天満宮』平凡社 二〇一五）残念ながら現在その存在は確認できないが、当時は室町將軍足利義満により行われた明德二年の一万句の懐紙も、足利義教により行われた永享五年の一万句興行の懐紙等も奉納され、神社の信仰上の核である内陣に御神宝として納められていたという。

なぜ奉納された連歌懐紙が内陣に納められたかという点、「連々法楽懐紙并檀方懐紙共今日奉納 内陣申者也、神威倍増、祈願成就、珍重々々」（延徳四年正月二日条）とあるように、連歌を捧げるといふことは、捧げられた神にとつては神威が倍増し、捧げた者は祈願成就が約束されるものであると信じられていたからである。中世において、連歌を行うことが、すなわち祈ることであり、天神の神威発揚を援ける行為であつたのである。

北野連歌会所と北野学堂

連歌を行い、懐紙を奉納することが、すなわち御祭神の神威発揚と奉納主の祈願成就に通ずるということが了解されていた北野天満宮において、その連歌の隆盛を支えたのが、室町時代においては幕府と密接化し多くの著名な連歌師が代々宗匠を務めてきた北野連歌会所と、近世においては、宮仕の教学施設として設置され神事と一体化した連歌会等を行なつてきた北野学堂であつた。

北野天満宮の連歌を語る上で欠かせない両者を、次頁で比較しつつ詳しく見ていきたい。特に北野の宮仕は、連歌なくして務まらぬといわれた。その宮仕の教学施設であつた学堂で行われる連歌会は、北野祭礼と表裏一体のものであつた。六月九日の宮渡祭でも、八月四日の例祭でも、現在梅花祭と呼ばれる菅公が薨去された日である二月二十五日の前日にも、学堂連歌が行われた。両者のあり方からは、連歌とともに育まれた独自の信仰の形を見ることができるといえる。

【北野連歌会所―宗匠に宗祇をいただいた連歌の殿堂】

- ◆ 設立 初出：永享五年（一四三三）
〔満濟准・后日記〕に足利義教が北野会所において連歌会を催したとある。
- ◆ 設立目的 北野天満宮に設けられた連歌活動を統括する幕府の機関。
室町時代を通して奉行（宗匠）は幕府により任命された。
近代（明治五年頃か）
- ◆ 終焉 外連歌会所：境内三ノ鳥居前西側（北野の馬場）
内連歌会所：御本殿南西
（現在建造物は喪失し、内連歌会所のものと伝わる井戸のみが御本殿南西に遺る。）
- ◆ 所在地

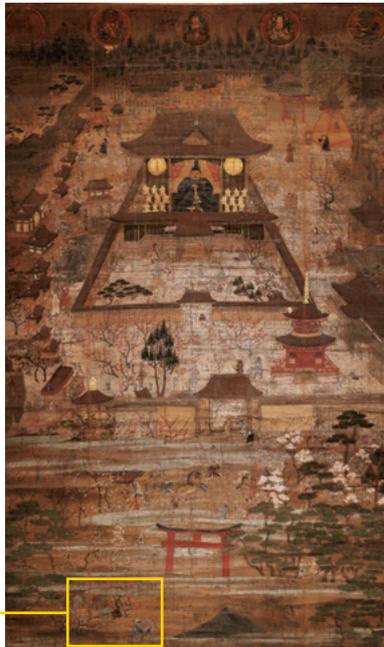
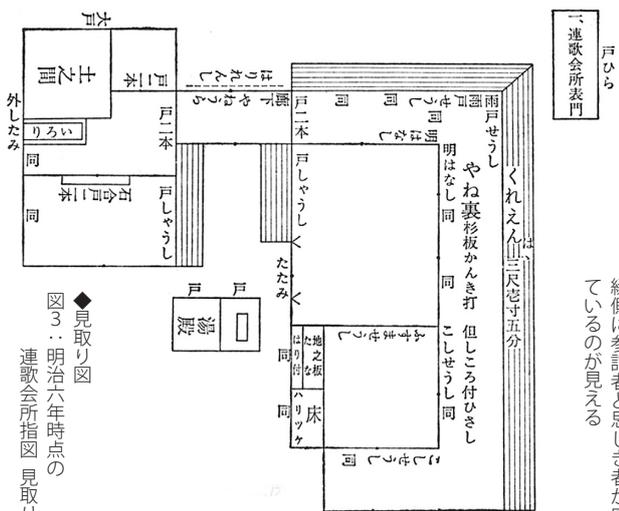


図1 北野曼荼羅（北野社頭図） 室町時代



図2 連歌所跡の連歌井戸（御本殿南西）



◆見取り図

図3・明治六年時点の

連歌会所指図 見取り図

毎日連歌会所（外連歌会所）縁側に参詣者と思しき者が座っているのが見える。

◆ 月次

毎月十八日
永享年間（一四二九〜四〇）頃より月次会が行われていた記録が残る。

◆ 連衆

但、会所が置かれる以前にも、当宮では元久元年（一一〇四）にはすでに社前にて歌合が行われ、文保元年（一一三一）頃からは社頭で千句興行を行い、明徳二年（一二九一）には三代將軍足利義満公による北野一万句興行が行われるなどしていた。その自然発生的な連歌会の隆盛を受けて、連歌会所が開かれたとも考えられる。それ以後も、願主が開く大きな連歌興行がしばしば行われていた。

◆ 管轄

室町幕府の後見 室町幕府による連歌奉行（宗匠）の任命があった。
前田玄以、豊田秀吉等が後見。
連歌興行の会料・志納金。

◆ 運営

連歌会所領（山城国東真崎郷内田地三町毎阿弥跡、洛中四条坊門、西洞院所々が北野連歌会所領として与えられ、そこから月銭、地子銭が納められ祈祷が行われていた。）この連歌会所領が安堵されていたことも、北野連歌会所の大きな特色の一つである。

◆ 沿革

境内で様々な連歌会が行われていたの背景に、連歌会所は北野天満宮で行われる連歌活動を統括する機関として室町幕府により建てられた。当初は、一般に開放される「外連歌会所（毎日連歌会所）」と開放されない「内連歌会所（奥会所）」の二所が並列しており、後者が宗匠をいただく正式な連歌会を行ったのに対して、前者は不特定多数の出入りが許され「傘で顔を隠し鼻を摘んで声をごまかし、個を消して場の連歌に興じる」笠着連歌なども行われていた。北野曼荼羅の絵に傘を被った男性が描かれているのはその暗喩だと考えられる。

江戸時代には、外連歌会所が廃止され、内連歌会所にて毎月の連歌興行が行われるようになり、「連歌堂」とも称された。この連歌会所にたいして、宮仕により運営された北野学堂を「上之連歌所」とも称するようになった。

永享四年（一四九〇）に將軍足利義教公が願主となり行われた北野一万句興行や永祿七年（一五六四）の「三好長慶歎築祈禱千句」、慶長七年（一六〇二）三月二十四日に行われた菅公七百年忌の連歌興行などは、全くこの内会所にて行われた。

なお、建物としての連歌会所は、何度も修繕、増改築が行われ、近世初期から中期にかけて少しずつ規模を拡大していた様子が見て取れる（寛文五年（一六六五）には五十畳半（高麗縁）との記録が残る）。しかし、十八世紀後半に至り、破損が激しく使用に耐えなくなってしまうため、安永三年（一七七四）から四年にかけて新造された。

会所には、享保年間（一七一六〜三五）頃より、御本尊として渡唐天神が祀られ、それとは別に毎月十一日の御祈禱会に使用する会所本尊三幅対があったことが『北野社記録』に記されている。

渡唐天神像は、禪宗の隆盛とともに世に流布した。菅公が唐に渡り一夜にして無準師範より仏教の奥義をさすけられ帰ってきたという伝説の姿を描いたものであり、連歌の神としての菅公はこの姿（道服姿）で祀られるのが習いであった。

【北野学堂—宮仕の教学施設・神事に付帯した連歌会を齎行】

- ◆ 設立 天和三年（一六八三）
（言葉としての初出は延宝九年（一六八二）だが、正式に北野社の衆中に告知せられたのは天和三年（一六八三）のこと。学堂文庫の設立は元禄十六年（一七〇三）。）
- ◆ 設立目的 連歌稽古并神歌儒之学問所（『学堂記録下書』）と書かれている通り、和魂漢才の宮仕の教学施設、ひいては一般の人々教化のための施設として作られた。
- ◆ 終焉 明治五年 学堂廃堂↓記録・連歌万句等は校倉に搬入されたという
- ◆ 所在地 北野上ノ森（西小路・境内北門の門外町）
- ◆ 見取り図

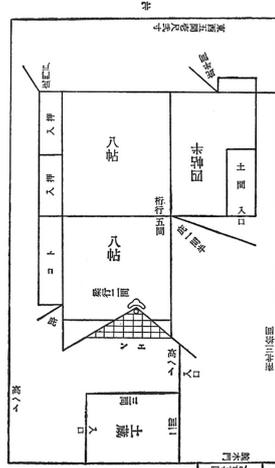


図4 天明八年（一七八八）ごろの学堂

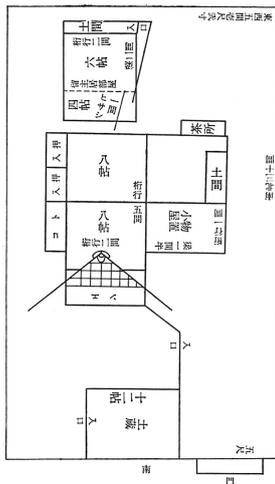


図5 天保九年（一八三八）ごろの学堂

- ◆ 月次 月に三回、主として六日、十八日、二十二日（例外も多かった。北野天満宮の祭礼に伴う「学堂連歌」が行われていた。
- ◆ 連歌会 二月二十四日 菜種の御供（現在の梅花祭・御祭神薨去の日）の前日
- 六月九日 宮渡祭（御祭神が北野の地に鎮座なされた日）
- 八月四日 例祭（一條天皇が初めて勅祭を行われた日）

特殊祭礼

- 臨時祭 初雪祭（影向松に初雪が積もった際に行われる祭）
- 歳暮の会（納会）・立春の会
- 七月七日 御手洗法楽
- その他
- 七月二十九日 宗祇忌日会
- 十月十三日頃 先師追善会
- 毎月十一日 御講会

◆ 連衆

宮仕 能順、能拜、能東のように「能」の文字がつくものが多かった。ただ、宮仕であれば誰でも学堂の連歌会に参加できたかというところではなく、月次連衆となるには連歌の技術のほか素行、人格等様々なことが求められ、選ばれしものという側面もあった。

◆ 管轄

宮仕 当初、宮仕の中の代表当番である年預が輪番制で学堂事務と什物等の物品管理を行う体制がとられたが、次第に輪番制に不都合が生じたらしく、寛政二年（一七九〇）

◆ 運営

ごろには留守居役をおくというような体制に移行した。宮仕の内学徳兼備のものが学頭として任じられ、一社の重役である年寄、連歌指導にあたる学堂宗匠もまた任命された。初代宗匠は能順（一六八八〜一七〇七）。講義に際しては、臨時に学者を招聘したこともあった。年寄と宗匠は北野社の顧問格であった。

◆ 沿革

北野天満宮における近世以前の連歌・学問を尊ぶ伝統と、近世を迎え天下太平の世が訪れ、社会の文治政策の機運が高まったことにより、「連歌の修練と神歌儒の研学機関」として設立された。最も重要な任務は連歌の修練であり、それに加えて手習い、「神歌儒」というように、孔子、孟子から、日本の古典文学、北野天満宮ならではの北野天神縁起、そして仏教の經典などの修練も行われた。学堂には八歳以上の宮仕の子弟の入学が許され、彼らはそのような環境下で教養を深め、御祭神へのさらなる奉仕に励んだのである。月次連歌三回に加え、前出のごとく神事・祭礼に付帯するさまざまな連歌会が行われていた。頻出する連歌会には、更に発句定など付帯する行事もあり、まさに連歌が学堂の機能の中心を占めていたことをものがたっている。また学堂の講義で用いられた具体的な教材としては、『論語』『大学』『中庸』『孟子』といった儒学の古典から、『伊勢物語』『源氏物語』などの日本文学、仏教の經典や北野天神縁起等、多岐にわたっており、様々な講義が行われていた。講義には宮仕のうち学徳兼備のものがあたる一方、外部の有識者もしばしば招聘されている。その講義に至るプロセスはきちんと何書が出されているなど、統治機構がしっかりと組織されていたことが窺えるが、一方で法度書がたびたび出されるなど構成員の素行不良や財政的な面で悩みがあった様子も垣間見られる。近世の北野の宮仕の間では二条流の古今伝授（古今和歌集の解釈を中心に、伊勢物語や源氏物語などの歌学や関連分野のいろいろな学説を師から弟子へ「秘説相承」のかたちで伝授すること）が行われており、その流れを受けた伊勢物語や源氏物語などの講義がこの学堂で行われていたことも推察される。建物に関しては、創立当初の学堂は、西小路にあった宮仕能養の屋敷を北野社衆中が銀一貫目で買取り修繕したものだ。その後享保十五年（一七三〇）の西陣大火により全焼。元文四年（一七三九）、学堂再興が試みられ、二間あまりの建物が竣工する。その後手狭であったため増改築が順次行われたようである。

北野天満宮境内には、連歌の殿堂と称され連歌史を紡いできた連歌会所と、宮仕の学問施設であると同時に神事と一体化した連歌興行を行ってきた北野学堂があり、この二つの施設が並列し、時に両者が補完し合いながら、都、ひいては日本の連歌の中心地であり続けた。

【主要参考文献】

- 竹内秀雄「北野学堂の研究—近世における神社の教学—（上・中・下）」『國學院雑誌』一九四二年
- 竹内秀雄『天満宮』吉川弘文館 一九九六年（一九六八初版）
- 瀬田勝哉編『変貌する北野天満宮』平凡社 二〇一五年
- 西山剛「北野祭礼神輿と禁裏駕輿丁」『世界人権問題研究センター研究紀要』第二六号 二〇二二年

壬寅 初詣

コロナ禍落ち着きの中、参拝者多く
マスクつけ、三密避けて願いは篤く

令和四年の初詣は、新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着きをみせている中とあって、猛威を振るっていた昨年とは異なり、三が日とも参拝者が多く賑わいを見せた。参道の露店も復活し、御本殿前ではマスクをつけながらも「家内安全」「志望校合格」「成績向上」「コロナ退散」など、様々な願いを込めた篤い祈りを捧げる人たちの行列ができた。

新年を迎える最初の神事は、例年通り三十一日午後四時から御本殿前中庭にて行われた年越しの大祓で始まった。神職・神社役員・崇敬者ら約百人が大祓詞を奉唱して、知らず知らずのうちに犯した罪や穢れを祓った。

同七時から御本殿で除夜祭を斎行、同七時半からは火之御子社の御神前で古式によって浄火の鑽り出しをする鑽火祭を斎行し、同十時から火縄が授与され寅年の初詣が始まった。

元日午前七時から御本殿において、官司以下神職によって新年最初の神事である歳旦祭が斎行され、皇室及び国家の隆昌と世界平和、氏子崇敬者を始めとする国民の弥栄を祈願した。

大晦日から元旦は時折雪が降り、一時は雪化粧ともなる寒空となったが、コロナの感染者が減り、穏やかな日常に戻っていることも反映し、途切れなく参拝者の列が続いた。元日午後、二、三両日とも青空が見られる好天となり、三密を避けながらもマスク越しにも参拝者の笑顔が境内一円で見てとれた。



神前書き初め『天満書』

筆始祭を斎行



一月二日午前九時から御本殿に菅公御遺愛の硯などをお供えして筆始祭を斎行した。
菅公は書道の神さまでもあり、その御神徳を偲ぶとともに書に親しむ人たちの上達を祈願し、この日から神前書き初め「天満書」を始めることを御奉告した。

マスクを付けても筆さばき力強く「天満書」

神前書き初め「天満書」が二日から四日まで絵馬所で行われ、マスクをつけた子どもや大人が元氣いっぱい書き初めをし、作品を奉納した。
天満書は、御神前で書き初めをして書道の上達を祈願する昭和二十七年以来行なわれている伝統行事。コロナの感染状況は落ち着いているとはいえ、出来る限り密集を避けるため、付き添いの保護者は一人に限定、用紙も一人三枚まで。書く時間も十五分と、昨年と同様の規制をして実施した。検温・手指消毒したマスク姿の子どもたちは、筆さばきも力強く書き初めに挑戦した。



書道の上達・学力向上を願って

奉納全作品を西廻廊と絵馬所で展示

審査により七百点が入選



奉納された「天満書」全作品二千五百六十六点の展示が、一月十九日から二十九日まで西廻廊と絵馬所で行われた。「梅花」「合格」「不屈」「安寧」「終息」「とら」などといった言葉が墨蹟鮮やかに書かれた作品が並び、参拝者が次々足を止め、見入っていた。

審査は、展示初日に書家の日比野博鳳・竹内勢雲・尾西正成・西村大輔の四先生と宮司で行われた。例年通りの入選作七百点（神前の部二百三十九点、家庭の部四百六十一）のほか、新設した梅花賞（一般者）に百八十八点を決めた。

入選者授賞奉告祭を斎行

賞状・記念品を授与所にて贈呈

一月二十九日に予定されていた入選者授賞式は、コロナ禍が再び憂慮される段階に入ったため、昨年に引き続き中止となり、御本殿において午前九時半より神職のみによって授賞奉告祭を斎行した。受賞者には授与所にて賞状と記念品が贈呈され、境内では受賞した子供たちの笑顔が弾けていた。

入選者は次のみなさん。

【神前の部】

- ▽天満宮賞 石原咲希（かおり幼稚園年少）、齋藤葵（朱雀第四小一年）、中川瑠心（南丹市立八木東小二年）、谷口安優美（亀岡市立つつじヶ丘小三年）、肥後美咲（城西小四年）、村上夏美（亀岡市立大井小五年）、宮出紅羅（曾我部小六年）、泉坂有璃（箕面市立第四中一年）、藤谷優衣（詳徳中二年）、丸山優奈（越谷市立南中三年）

▽京都新聞特別賞 木田真優（大宮小六年）

- ▽京都新聞賞 佐藤奏絵（亀岡市立安詳小一年）、足立啓輔（奈良市立佐保小二年）、中田理二（錦林小三年）、後藤颯太（嵐山東小四年）、武政歩志（碧南市立西端小五年）、前川結南（西賀茂中一年）、小蘭井陸也（早稲田実業中等部三年）

▽鳩居堂賞

- 中嶋太庸（随林寺保育園年長）、水野翔太（大塚小一年）、小倉夏梨（錦林小二年）、木村咲瑛（詳徳小三年）、大橋千種（桂徳小四年）、中西希実（大宮小五年）、中西美結（老上西小六年）、松浦拓夢（亀岡市立南桑中二年）

▽金賞 武政歩希（碧南市立西端小一年） 始め八十九人

▽銀賞 井上瞬（嵯峨小一年） 始め百二十二人

▽梅花賞 降矢茉奈（一般） 始め百六人

【家庭の部】

- ▽天満宮賞 松山桃子（京都きらら学園年長）、山岡ひびき（竹田小一年）、小倉夏梨（錦林小二年）、小菅陽菜子（京田辺市立普賢寺小三年）、肥後美咲（亀岡市立城西小四年）、村上夏美（亀岡市立大井小五年）、宮出紅羅（亀岡市立曾我部小六年）、増田人（浅野書道教室、中学一年）、松浦拓夢（亀岡市立南桑中二年）、石崎葵衣（府立園部高附属中三年）

▽京都新聞賞

- 藤野尚哉（芝池書道教室、小学一年）、土山音空（伏見住吉小二年）、長野詢（魁書道會、小学三年）、平井莉世（亀岡市立つつじヶ丘小四年）、並川珠璃（京田辺市立普賢寺小五年）、山下大智（詳徳小六年）、齋藤樹の（亀岡市立東輝中一年）

▽鳩居堂賞

- 西澤実耶（桂東こども園年中）、辰巳 玲実（京田辺市立普賢寺小一年）、恩田心寧（芝池書道教室、小学二年）、中田理一（錦林小三年）、和田真緒（桂徳小四年）、伊東亮輔（京田辺市立普賢寺小五年）、谷次莉奈（桑名市立藤が丘小六年）、齋藤恒（洛星中二年）

▽金賞 向瀬空音（上賀茂小一年） 始め百七十人

▽銀賞 松谷立夏（柘野小一年） 始め二百六十六人

▽梅花賞 谷直紀（一般） 始め八十一人

コロナ禍収束を願って
招福の梅枝「思いのまま」授与に人気

当宮の正月の縁起ものである招福の梅枝「思いのまま」の授与が元旦より始まり、初詣参拝者の人気を集めていた。

梅枝「思いのまま」は、年末に剪定した梅苑始め境内一円の梅の枝に、二月の菅公を偲ぶ梅花祭で御神前に供える特殊神饌の「厄除け玄米」を瓢箪に入れて添え、邪気消除と厄除けの願いを込めた当宮ならではの授与品。

コロナ禍は若干落ち着きを見せているとはいえ、まだまだ収束の見通しが立っていない新年だけに、今年一年の家族の健康を願う人たちが次々に受けられていた。



「お国歌舞伎」がお目見え

楼門の西陣糸人形

恒例の西陣つくりもの「糸人形」が、今年も元日から五日まで楼門内側の右左に飾られ、初詣参拝者の足を止めさせていた。

この糸人形は、西陣織工業組合の依頼によって毛利

ゆき子西陣和装学院学長の監修に基づき、有志の皆さんが毎年テーマを変えて制作している。

今年の右側のテーマは「お国歌舞伎」で、歌舞伎の祖とされる出雲のお国の颯爽とした立ち姿のお目見えとなった。お国（阿国）は、慶長八年（一六〇三）、当宮境内の舞台で興行したとされ、その様子を描いた屏風図もあるなど当宮とは縁が深い。

左側は艶やかな着物をまとった藤娘が登場した。



池坊京都支部の献華展

華道家元池坊京都支部による新春を彩る献華展が元日と二日、神楽殿で催された。

新春恒例の催しで、立花・生花・自由花の形でいけられた正月らしい生け花が飾られ、初詣参拝者の目を楽しました。



〈審査員の講評〉

菅原道真公を祀る北野天満宮の社頭で、一年の初めに書き初めをする天満書の意義は大きく、そこには上手下手という域を超えたものがある。コロナ禍という鬱陶しい雰囲気の中だが、奉納された作品を見る限り、そうしたものは微塵も感じられず例年通りみんな元氣一杯筆をふるっていた。

家庭の部の一般の作品を見ると、子どもに奉納作品を書かせながらも一枚書いて奉納されている姿が伺え、心動かされた。その子どもたちが親になった時、同様に息子や娘に天満書をさせ、賞を頂けるよう頑張ってもらおう、こうした伝統の継承が市民に根付いているならうれしい。何としてもこの天満書の伝統は続けなければならない。

「書は心画なり」。機械文明全盛の時代だが、手で文字を書くことの意味を知り、それによって人間は磨かれていくことを知ってほしい。

新春奉納狂言

新春恒例の奉納狂言が一月三日、神楽殿で猿楽會と茂山忠三郎社中によって催された。

『末広かり』『昆布売』『仏師』『口真似』『福之神』の五番が上演され、初詣の参拝者が、生の狂言を楽しもうと、足を止め見入っていた。



初雪祭を齋行

影向の松御前にて

毎年三冬（立冬から立春前日）までの間に初雪が降ると、菅公が影向の松に降臨され歌を詠まれるという伝説に基づく初雪祭が、旧臘十八日に齋行された。



初天神

露店並び、合格祈願賑わう



一月二十五日の初天神は、例年より若干少なかつたとはいえ「天神市」の露店が並び、まずまずの日和の中、賑わいを見せた。昨年の初天神がコロナのまん延によって露店が中止となっただけに、「縁日の中でも初天神は特別。露店が出ていてうれしい」とマスク姿の参拝者。受験シーズンに入っており、一願成就の牛社前は合格祈願の行列ができ、絵馬掛け所も大賑わいだった。

コロナ禍、被え！厳肅に節分祭

追儺狂言・日本舞踊奉納・福豆袋は手渡し

節分の二月三日、御本殿で午前十時から節分祭を厳肅に齋行した。午後は神楽殿で北野追儺狂言と日本舞踊の奉納を行ったが、コロナ禍における密集を避けるため例年行っている殿上からの福豆袋まきはやめ、参拝者へ手渡しにするなど慎重な豆まきとなった。



京都では、節分にゆかりの四社寺に参拝する「四方詣り」の風習があり、当宮はその締め括りを担う重要な社として信仰を集めている。コロナ禍は再び予断を許さない状況となっており、災難除けの御札や御守り、銀幣を授かる参拝者が目立った。

北野追儺狂言は、摂社福部社の御祭神「福の神」が京の都を荒らす鬼を追い払うという

伴氏社例祭

菅公母君を偲び

子供の成長と学業成就を守護する社として崇敬篤い伴氏社（表参道・二ノ鳥居そば）の例祭を、一月十四日に齋行した。御祭神は菅公の母君で、大伴氏の出身であることから伴氏社と称されている。かつては石造りの五輪塔が設けられていたが、明治維新の神仏分離令により、現在は当宮南に隣接する東向観音寺に移設されている。また社殿前の石鳥居は鎌倉時代制作の鳥居で、石作りの台座は蓮弁を模った珍しい形をしていることから、京都市の重要美術品にも指定されている。



当宮ならではのオリジナル狂言。例年通り茂山千五郎社中によって奉納され、福の神から豆をまかれて鬼が退散すると参拝者から拍手がおくられた。

この後、上七軒歌舞会のような福豆袋による豆まきはとりやめて、「福は内!」「鬼は外!」の掛け声で、文字通りの豆まきを行った。終了後、福豆袋は参拝者に一人ひとりに福豆袋を配った。



豆まき



上七軒歌舞会



茂山千五郎社中

五穀豊穰を祈り
大祭春祭を齋行

今年の五穀豊穰を祈念する大祭春祭を、三月十五日午前十時から御本殿に神社役員・崇敬者ら参列の下、厳かに齋行した。

宮司が祝詞を奏上した後、菅公五歳の時に詠まれた御歌に曲と舞をつけた巫女舞「紅わらべ」が奉納された。神職が「美しや紅の色なる梅の花……」と、朗々と詠じるなか、梅の枝を手にした巫女が優雅に舞い上げた。この後、宮司をはじめ参列者が次々玉串を捧げた。

祭典を終え、宮司が参列者に「春祭で五穀豊穰と皆さま方の無病息災を祈りました。梅苑・

花の庭が完成し、今、梅が咲き誇っています。ぜひご覧になって下さい」と、挨拶した。

この日は、一足先に春爛漫の陽気となり、梅苑はもとより境内一円の梅花は満開となり、多くの参拝者で賑わった。



梅風祭を齋行

八乙女舞に代わり巫女舞を奉納

当宮崇敬者で組織されている梅風講社（小石原満講社長）の祭典である梅風祭を、三月二十五日午後三時から御本殿で齋行した。

梅風講社は、明治の初め数多くあった天神講を一つにまとめて結成された崇敬者の団体。日頃から様々な面でご奉仕いただいているが、とくに十月の瑞饋祭に際しては、八乙女や稚児の人選・指導、行事の世話などに尽力いただいている。

宮司の祝詞奏上の後、小石原講社長らが玉串を捧げ、梅風講社の益々の発展と講社員の無病息災を祈願した。

従来ならこの後、おすべらかしの髪に花飾りをつけた八乙女が鈴舞を奉納するが、コロナ禍によって今年も昨年、一昨年に引き続き中止となり、代わって当宮巫女と神職によって巫女舞「紅わらべ」が奉納された。

祭典後、宮司が「コロナ禍によって今年も八乙女の舞が出来ず、残念でした。毎日、コロナ禍の収束を祈っており、今秋の瑞饋祭は盛大に行われることと思います」と、挨拶した。



祈願絵馬焼納式を齋行

十万枚の願いをお焚き上げ

入試合格・コロナ禍収束・家内安全など、様々な願いを込めて当宮に奉納された祈願絵馬や厄除け割札約十万枚を浄火をもって焚き上げて、願掛けされた参拝者の無病息災を祈願する祈願絵馬焼納式を、四月五日午前十時から境内中ノ森広場で齋行した。

祈願絵馬焼納式は、新年度を迎えるこの時期に毎年行われる恒例の神事だが、昨年はコロナ禍の影響で神事が中止となったため二年ぶりの齋行となった。

しめ縄を張り巡らせて齋場となった参拝者駐車場でもある中ノ森広場には、奉納された祈願絵馬や厄除け割札がうず高く積み上げられた。神職による祝詞奏上後、御本殿において火打ち石で鑽り出した浄火を付け



木に移して点火すると、絵馬や割札は音をたてて勢いよく燃え上がった。焚き上げの間は、神職が交代で大祓詞を奏上した。

表参道を行く参拝者が次々足を止めて焼納式の様子を見、神職の説明を受けて、その場で厄除け割札を奉納する人もいた。



献酒祭

五月十七日

酒造組合や酒造会社の代表らが参列し、御神前に新酒を供え、良い酒ができたことに感謝するとともに、酒造りの安全と業界の繁栄、関係者の息災を祈願する祭典。
室町時代、当宮神人に麴造りの特権（北野麴座）が与えられたことから酒造関係者の崇敬が篤く、関西を中心に約六十軒あまりの酒造会社や酒造組合より日本酒の奉納がある。



文子天満宮例祭（居祭）

四月十四日・十七日

昨年・一昨年と、新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、神輿渡御は中止とし、御社殿にて居祭を行ってきたが、本年も同様に、境内の御社殿での居祭とする。
当祭の由緒は、天慶五年（九四二）西ノ京に住む多治比文子という童女に「右近の馬場（現在の本社の鎮座地）に菅原大神を祀るように」との御神託があった故事により、この文子の宅跡を霊地として文子天満宮として称え祀った。



火之御子社例祭

六月一日

「雷除大祭」の通称で親しまれる撰社火之御子社の例祭。
火雷神（からいしん）を祀った火之御子社は、本社北野天満宮鎮座以前よりこの地にあり「北野の雷公（らいこう）」と称えられ、雷電・火難・五穀の守護として、朝廷の篤い崇敬を受けた。
当日の特別授与品として雷除のお守りや御札を授与するほか、参道には露店が並び終日賑わう。



明祭（中祭式）

四月二十日

菅公は、昌泰四年（九〇一）藤原時平の讒言によって無実の罪を着せられ大宰府に流される身となった。その地で菅公が薨去されてから二十年後の延長元年（九二三）四月二十日、晴れて菅公の冤罪が解かれ、右大臣に復し正二位に昇進、左降の宣言が焼却された日にあたることから、その喜びを御神前に奉告する祭典を執行する。



梅の実ちぎり

六月中旬

正月の縁起物として新年の祝膳に欠かす事の出来ない「大福梅」の実摘み取りを当宮神職・巫女・職員らと、氏子崇敬者の奉仕により、六月中旬から約一週間がかりで行う。

梅とゆかりの深い当宮には、約五十種・千五百本の梅の木がある。収穫は例年約二トン程を見込んでおり、採取した後すぐに塩漬され、梅雨明けを待って境内で土用干しを行う。



宮渡祭（中祭式）

六月九日

多治比文子と近江国比良宮の神主神良種（みわのよしたね）の子太郎丸という七歳の少年に御神託があり、文子・良種・北野朝日寺の僧最鎮等が協力し、平安京の北西（乾）の北野の地に菅公の神霊・菅原大神をお祀りしたのが、天暦元年（九四七）六月九日であることから、この日に御本殿において祭典を行う。



竈社例祭

六月十七日

家庭の守護神である庭津彦神（にわつひこのかみ）・庭津姫神（にわつひめのかみ）の二柱と火を司る火産霊神（ほむすびのかみ）をお祀りする。

古来、この神々は当宮の御供所のかまどに祀られていたもので、御社殿床下には現在も古くより使われた大釜が安置されている。

また御社殿前には「明智の鳥居」と呼ばれる石鳥居が奉納されている。



青柏祭

六月十日

古代より柏の葉は、御神前への供物の下に敷いたり包んだりするために用いられ、祭事用として神聖に扱われていた。

当宮でもこの日に、柏の青葉に御飯を包み御神前に供えて、日々の神恩に感謝し、季節の変わり目の無病息災を祈願する。

また併せて、クルミと梅水をお供えする。

（十四ページに詳細解説）



祭事 暦 (4月1日～6月30日)



《4月》

| | | |
|-----|-------|--------------------------------|
| 1日 | 午前10時 | 月首祭 |
| 3日 | 午前10時 | 神武天皇陵遷拝式 |
| 5日 | 午前10時 | 祈願絵馬焼納式 |
| 10日 | 午前10時 | 賣茶本流献茶式 |
| 14日 | 午前11時 | 末社 文字天満宮例祭 神幸祭当日祭 (居祭・祭典のみ) |
| 15日 | 午前10時 | 月次祭 |
| 16日 | 午前10時 | 摂社 地主神社例祭 |
| 17日 | 午後2時 | 末社 文字天満宮例祭 遷幸祭当日祭 (居祭・祭典のみ) |
| 19日 | | 参 籠 |
| 20日 | 午前10時 | 明祭 (中祭式) |
| 25日 | 午前9時 | 月次祭 |
| | 午後4時 | 夕神饌 |
| 29日 | 午前10時 | 昭和祭 |

《5月》

| | | |
|-----|-------|---------|
| 1日 | 午前10時 | 月首祭 |
| 5日 | 午前10時 | 兒童成育祈願祭 |
| 15日 | 午前10時 | 月次祭 |
| 17日 | 午前11時 | 献酒祭 |
| 25日 | 午前9時 | 月次祭 |
| | 午後4時 | 夕神饌 |
| 31日 | | 参 籠 |

《6月》

| | | |
|-----|-------|--------------------|
| 1日 | 午前4時 | 摂社 火之御子社例祭 (雷除大祭) |
| | 午前9時 | 月首祭 |
| 8日 | | 参 籠 |
| 9日 | 午前10時 | 宮渡祭 (中祭式) |
| 10日 | 午前10時 | 青柏祭 |
| 15日 | 午前10時 | 月次祭 |
| 17日 | 午前10時 | 末社 竈社例祭 |
| 24日 | | 参 籠 |
| 25日 | 午前9時 | 御誕辰祭 (中祭式)・大茅の輪くぐり |
| | 午後4時 | 夕神饌 |
| 30日 | 午後4時 | 夏越大祓・茅の輪神事 |

○4月14～17日文字天満宮の神輿渡御は本年中止。
居祭として14日及び17日に祭典のみ斎行。



月釜献茶 (4月1日～6月30日)



《4月》

| | | | | |
|-----|--------|-------|-------|----|
| 1日 | 献茶祭保存会 | 藤原 宗順 | (明月舎) | 中止 |
| 10日 | 梅文会 | 横田 宗重 | (松向軒) | 中止 |
| 15日 | 献茶祭保存会 | 中田 宗俊 | (明月舎) | 中止 |
| | 松向軒保存会 | 村上 宗美 | (松向軒) | |
| 24日 | 紫芳会 | 布施 宗青 | (松向軒) | |

《5月》

| | | | | |
|-----|--------|-------|-------|--|
| 1日 | 献茶祭保存会 | 田中 宗真 | (明月舎) | |
| 8日 | 梅文会 | 吉岡 宗美 | (松向軒) | |
| 15日 | 献茶祭保存会 | 堀内 社中 | (明月舎) | |
| | 松向軒保存会 | 赤松 宗武 | (松向軒) | |
| 22日 | 紫芳会 | 梶川 芳明 | (松向軒) | |

《6月》

| | | | | |
|-----|--------|--------|-------|--|
| 1日 | 献茶祭保存会 | 速水 濂源居 | (明月舎) | |
| 12日 | 梅文会 | 大岡 操恵 | (松向軒) | |
| 15日 | 献茶祭保存会 | 北風 宗照 | (明月舎) | |
| | 松向軒保存会 | 秦 宗周 | (松向軒) | |
| 26日 | 紫芳会 | 井田 宗美 | (松向軒) | |

○新型コロナウイルス感染症の影響により、日程の変更、もしくは中止となる可能性があります。あらかじめご了承願います。



六月二十五日

御誕辰祭 (中祭式)
大茅の輪くぐり

六月二十五日は菅公の御生誕の日にあたるため、御本殿にて御誕辰祭を斎行する。
菅公は、菅原是善公(文章博士)の第三子として、承和十二年(八四五)六月二十五日、京の都で生を享けられた。またこの日は「夏越天神」といわれ、酷暑の真夏を控え、氏子・崇敬者の健康と厄除を願い、楼門で、直径五メートルの「大茅の輪くぐり」を行う。



六月三十日

夏越の大祓

日常の生活の中で無意識のうちに身に付いた罪や穢れは、古くより六月と十二月の晦日に斎行する大祓式で祓い清められてきた。特に六月の大祓は「夏越の大祓」と称し、素戔嗚尊に旅の宿を供し難儀を救った蘇民将来の故事に倣い、茅の輪をくぐり、罪や穢れ・災厄を祓う茅の輪神事を、御本殿前中庭にて斎行する。

献茶祭保存会だより



厳しい状況下ではありますが、茶の湯文化という日本文化の素晴らしさを発信し、本年は少しでも月釜が開催できることを切に願っております」と年頭の挨拶をした。引き続き献茶祭保存会宰領の渡辺孝史氏が、年始のご挨拶と月釜ご奉仕の担当者に對し感謝の意を述べられた。

例年であれば、親しく歓談の時間を設ける初寄りも、コロナ禍の影響に鑑み今回は自粛とし、事務局より月釜奉仕者に委嘱状を交付して閉会となった。

なお令和四年度の月釜開催の有無は、引き続き社会情勢により中止や変更の可能性がある。

北野天満宮献茶祭保存会の初寄りを、一月七日同保存会役員並びに令和四年度の明月舎月釜奉仕者が一堂に会して茶室明月舎にて開催した。

コロナ感染症拡大防止のため一昨年来、明月舎月釜はほぼ開催が出来ず、令和三年に至っては全ての月釜が中止せざるを得ない状況下で迎えた初寄り茶会。宮司は「現在もコロナ禍という

京都連歌の会「梅ヶ枝連歌会」張行



当宮は中世には連歌の神としても崇敬され、境内には連歌会所が設けられ、著名な連歌師が奉行職についた。びたび連歌会が開かれたという縁から、同会は、紅梅殿において秋には「もみじ連歌会」、そして春には「梅ヶ枝連歌会」を開くことを恒例としている。（関連の記事、この日の奉納作品は三十四頁に掲載）

京都連歌の会主催による「梅ヶ枝連歌会」が三月六日、紅梅殿で催され、「賦何木連歌」で詠まれた四十四句が奉納された。

この日は学校で連歌を勉強しているという京都府立南丹高校の生徒の初参加もあり、連歌人口の広がりを望む会員を喜ばせた。



岩津天神太鼓、結成三十年記念
正式参拝の後、船出の庭で太鼓奉納



演奏を行っている。

当宮での奉納は、千百年大萬燈祭（平成十四年）を皮切りに平成二十四年、平成三十年と続く四回目、今回は同太鼓結成三十年記念。子どもチームによる「遊」と大人チームによる「凜」で結成されているが、代表の近藤孝義さんは「大人の方はコロナの影響によって練習不足となり、今回は残念ながら子どもチームだけによる奉納となりました」と話されていた。

奉納に先立ち子ども代表が「コロナで大変な時ですが一所懸命やりますので聴いて下さい」と挨拶した後、約十五人の子どもがオリジナル曲など六曲をバチさばきも鮮やかに演奏し、足を止めて聴き入っていた参拝者の拍手喝采を浴びていた。

岩津天満宮（愛知県岡崎市）の岩津天神太鼓の子どものメンバーとその同伴者約三十人が四月三日、御本殿に正式参拝した後、紅梅殿船出の庭で太鼓を奉納した。

同太鼓は、町おこし活動の一環として結成され、岩津天満宮での奉納のほか岡崎市の行事などでも依頼されて



「御池クリニックレディースプラザ」
当宮神職が出仕し、竣工式を斎行



医療法人知音会（田邊卓爾理事長）が運営する「御池クリニックレディースプラザ」が京都市中京区西ノ京に完成三月十八日、当宮神職が奉仕し、竣工式を厳肅に斎行した。

神職が祝詞奏上した後、巫女が「紅わらべ」を奉納し、参列者が次々と玉串を奉奠して竣工を祝った。

田邊卓爾理事長は、当宮責任役員の田邊親男氏（親友会グループ会長）のご子息であり、式典の後、参列者を代表して宮司が「父上には、日ごろから大変お世話になっていきます。本日はレディースプラザの竣工、まことにめでとございます」と述べ、乾杯の音頭を取った。

この後、竣工した建物の前で参列者によるテープカットが行われた。

同プラザは、鉄筋四階建て。関西初の女性専用人間ドックをメインとしたクリニックで、四月一日開院した。



文道会館で上七軒匠会のお店と
美味しいコーヒー・梅を楽しむ催しを開催
上七軒はんなりマルシェ



当宮の東門から今出川通りへと続く「上七軒通り」を中心にお店を構える、約四十店舗からなる商店会として活動する「上七軒匠会」主催による商店会イベント「上七軒はんなりマルシェ」が二月二十日当宮文道会館ホールにて開催された。

当宮の梅苑「花の庭」公開にあわせ、上七軒のお店に加えて今回は京都市内で人気のコーヒー店も出店。上七軒の芸舞妓も花を添え、観梅で訪れた参拝者をもてなした。

北野天満宮門前花街「上七軒」は、室町時代にできた京都最古の花街。室町期の北野天満宮御社殿修造の折、使われた木材の一部を用い七軒の休憩所を建てたのがその始まり（七軒茶屋）。以来、当宮とともに京都花街の伝統文化を継承し、発展させている。



賑わい戻る御縁日
天神市に多くの参拝者



コロナ禍により発令されていたまん延防止等重点措置なども解除となり、止まっていた社会活動も徐々に動き出した三月下旬、二十五日恒例の御縁日「天神市」が開催された。

天候にも恵まれ、各所の桜も咲き始めた京都は地元の方々や観光客で久々の賑わいとなっており、京都伝統の御縁日に参拝する人々が多く訪れ、境内では、御折袴や御神楽を受ける参拝者が数多く見られた。

「第五回ものづくりTenmangu」開催
中ノ森広場 七十の手づくり市並ぶ

「第五回ものづくりTenmangu」が四月三日、境内中ノ森広場で開催され、約七十の手づくり市のブースが並び、足を止める参拝者で賑わった。

この催しは、各所で手づくり市を開いている「ものづくりCrossroad」（山中陽太代表）が、「伝統文化が根付いている当宮でも」と、二〇一九年春に初めて開催した。このところコロナ禍で中止や日延べもあって今回が五回目。

コロナ禍の為、食べ物市は出席出来なかったが、布小物や木工作品、陶器、アクセサリーなどの手づくり市のブースが並んだ。曇り空で時折小雨が降るといいうあいにくの空模様だったが、参拝者が次々足を止め、手づくりの品々を手にとっていた。



第8回京都少年フットサルリーグ

北野天満宮杯を開催



特定非営利活動法人京都市サッカー協会（五十川繁会長）が運営する京都少年フットサルリーグが一月二十二日、京都市左京区宝ヶ池フットサルコートにて開催された。

今年で八回目を迎える本リーグは「北野天満宮杯フットサルリーグ」として毎年開催されている少年サッカー大会。寒空の下、サッカー少年たちが、武道の神様でもある当宮の北野天満宮杯をかけたトーナメント戦を繰り広げる。

参加対象は小学六年生（U-12）で、8チームによる総当たり戦。本年は、決勝戦に南太秦サッカースポーツ少年団、A.C. Gloria、ランファン・サッカースポーツ少年団、R、ランファン・スポーツ少年団Wのそれぞれ4チームが勝ち残り、優勝を目指してピッチを縦横無尽に駆け回り、白熱のプレーを見せた。

なお結果は、ランファン・サッカースポーツ少年団Rが見事優勝を果たした。



天神さん
思い出写真館



昭和三年春齋行の千二十五年半萬燈祭における社務所前と三光門外の「神符授与所」の風景である。「千二十五年祭御札御守」の字がはつきり読み取れる。当時のファッションに注目してほしい。ほぼ和服姿で、男性は一様に同じような帽子をかぶっている。小学生らしい子どもが写っているが一人は学生服、もう一人は緋の着物姿で、下駄を履いている。昭和初期の「晴れの日」の服装なのだろう。のどかな中にも萬燈祭参拝の喜びの雰囲気



が漂う。期間中、京都市電は梅鉢の神紋を染め抜いた小旗四本を車体の前後に掲げ、奉祝の機運を盛りあげたという。

なお、この年の十一月十日、京都で昭和天皇の即位式が挙行されている。萬燈祭を祝して創られた「踊唱歌」の一部を紹介する。

千燈萬燈 梅は香でもつ松色でもつ
京の北野は神でもつ 千燈萬燈



正式参拝された皆様（敬称略）（一月～三月）

- 二月 六日（日） 関西医科大学耳鼻咽喉科
- 二月二十六日（土） マリアズベビーズソサエティー
松岡まりあ氏
- 三月 三日（木） 西陣織工業組合「女性が着物で集う会」
- 三月 四日（金） 國寶俱樂部・京都観光企画株式会社

挙式された皆様（一月～三月）

- 三月二十六日（水） 大谷 翔・菜雪 ご夫婦
- 新郎新婦様、御両家の皆様のお永いご多幸をご祈念申し上げます。

辞令交付

○権宮司 神原孝至
権宮司に神原孝至禰宜が就任。令和四年四月一日付にて神社本庁より拝命。



〈神原孝至 略歴〉

昭和四十四年、兵庫県神戸市生まれ。平成元年、京都皇典講究所京都國學院卒業。同年北野天満宮奉職。平成五年同権禰宜。平成二十五年同禰宜。

この間、社報『天満宮』創刊より編集委員長を務め、史跡御土居整備事業委員会事務総長、例祭「北野御霊会」・「御本殿石の間通り抜け神事」・「御手洗川足つけ神事」・紅梅殿「船出の庭」・和漢朗詠「曲水の宴」などの重儀を再興。北野の文化発信拠点とした「文道会館」建設に尽力。令和二年より北野天満宮文化財・境内七十棟全ての建造物・金甲類・法楽和歌・連歌他古文書再調査委員会事務総長など歴任。

また崇敬団体「神若会・北野天神太鼓会」や「北野祭保存会」「北野神輿会」などを設立し、氏子地域の活性化や青少年育成にも力を注ぎ、当宮発展に務める。

連歌の心ことはじめ 二

梅が香のただようころ、梅が枝連歌会を張行いたしました。
発句「雪月花令和に興すや梅の庭 重十九」と、新たに成った「花の庭」が詠みこまれました。「梅」を「はな」と読みなしています。「花」の句は、世吉四十四句の中で二句しか詠めないとても大切な素材です。そして連歌では桜を思いえがいて詠むことがならいとなつています。しかし、北野天満宮ではご祭神である道真公が梅の花をこよなく愛されたというところに因み、天神さまを思いあわせる句での梅は「花」の句とする、と北野だけの式目を新たに認めることといたしました。

今回の名残表には「児」と「笠着」による付句があります。
名残表一句目はご神職により、お宮で行われた曲水の宴を詠まれた神祇の句です。神祇には神祇を続けるところですが、ここで「赤子」の句が出され、一同息を飲みました。続けて出されたのが「生きる音」。これもまた生命の輝きが詠まれ、座が静まりました。この両句は京都府立南丹高等学校の「京都文化学入門」担当教諭と生徒の句です。さらに五句目では、当日にわかに降り出したあられが詠まれています。当句は通りがかりの方の句で、こうした付け方を「笠着」と言います。『北野曼荼羅』には、左下の大鳥居の外「毎日連歌会所」の縁に座る笠着の姿が描かれています。

高校生を「児」と呼ぶにはいささか礼を失するかもしれませんが、「児」とは神仏の憑依者と考えられており、また「笠着」は旅人に姿をやつした神霊とするもので、詠まれた句のままにいただくのが連歌の習慣となっております。「児」と「笠着」がゆかしいものであることが、今回の法楽であらためてわかった気がいたします。

次回は紅葉が色づき始めるころに張行を予定しています。皆さまにも笠着の連歌をお待ちいたしております。

(京都連歌の会・大村敦子)

連歌奉納

令和四年三月六日

於 北野天満宮 紅梅殿

宗匠 光田 和伸

執筆 大村 敦子

聖廟法楽

賦何木連歌

梅が枝 世吉

初折表

雪月花令和に興すや梅の庭

千歳百歳鳴く百千鳥

四方の山笑へば雲もなびくらん

潮のかほりに舟はゆれつつ

いづこへとまとふやかにるき旅の袖

心身に入むふるさとの風

望の影おほかた露を宿しけり

鈴虫となるあはれまたなき

初折裏

事無酒白埴の瓶みしたる

笠ははや眠りをるらし

引き結ぶ小さき文は届けえで

思ひばかりにぬる、衣手

空蟬の残り香はなほありながら

闇ぞあやなき短か夜の闇

暁の光待たるる海士が家

芦のはなちるなにはにぎはふ

聞かばやとをればほどなく遠砧

秋や憂き身にいくめぐりせむ

老いの坂露けき袖はしをらずや

御法に依れと沁むる糸月

わが庵は松と桜におほはれて

霞の奥へ雁を行かする

名残表

ちはやふる天神に捧げん春の白拍子

赤子は握手まだ合はせえぬ

生きる音母のおなかに耳そへて

晴れたる空の遠き山びこ

雲出でて古木がうへにあられふる

おうなとなりてなほ燃やす胸

辛きとてうたはば歌になりぬらん

牛も歩みをとどめこそすれ

裾ぬれて塩を汲みたる青き海

伊勢への旅は急ぐともなし

あとさきに付きくる月を友として

空き地静かにすすきゆれるる

稲を刈り現れた虫ちりぢりと

めぐみみちびけみ仏の風

名残裏

古里の川はいづくへ流るらん

浦の別れをうちかさねつつ

夏終はる煙火の音がなりやんで

ゆふだち上がり透きとほる空

うららかな陽ざしもしるくさしこめる

遠き野末に霞む山の端

御前に咲き満つ花の香もゆかし

真の道を吹き渡るこち

句上

橘 重十九

光田 和伸

同子 まり絵

森 亮子

押川 かつり

楠彦

良太

潤耶

亮子

より子

正純

満千子

和伸

亮子

和行

まり絵

潤耶

良太

かつり

亮子

満千子

潤耶

良太

和行

かつり

まり絵

敦子

和伸

景子

満千子

亮子

かつり

和伸

和行

和伸

名残表

ちはやふる天神に捧げん春の白拍子

赤子は握手まだ合はせえぬ

生きる音母のおなかに耳そへて

晴れたる空の遠き山びこ

雲出でて古木がうへにあられふる

おうなとなりてなほ燃やす胸

辛きとてうたはば歌になりぬらん

牛も歩みをとどめこそすれ

裾ぬれて塩を汲みたる青き海

伊勢への旅は急ぐともなし

あとさきに付きくる月を友として

空き地静かにすすきゆれるる

稲を刈り現れた虫ちりぢりと

めぐみみちびけみ仏の風

名残裏

古里の川はいづくへ流るらん

浦の別れをうちかさねつつ

夏終はる煙火の音がなりやんで

ゆふだち上がり透きとほる空

うららかな陽ざしもしるくさしこめる

遠き野末に霞む山の端

御前に咲き満つ花の香もゆかし

真の道を吹き渡るこち

句上

橘 重十九

光田 和伸

同子 まり絵

森 亮子

押川 かつり

楠彦

良太

潤耶

亮子

より子

正純

満千子

和伸

亮子

和行

まり絵

潤耶

良太

かつり

亮子

満千子

潤耶

良太

和行

かつり

まり絵

敦子

和伸

景子

満千子

亮子

かつり

和伸

和行

和伸

北野天満宮 梅花祭献句

令和四年二月二十五日

宮司 橋 重十九選

- 天 忘るまじ初心問いかけ梅の白 梅葉
地 それぞれに聞く梅の花光けり 梅志づ
人 吹く風にだらりの帯やしだれ梅 市すず
佳 ふと歩き道すがらに咲く紅梅の愛しき姿舞妓と重ぬ 照代
佳 花の庭笑顔交差の梅ふふむ 梅嘉
佳 八棟に公の御心探しなば 尚絹
佳 庭先の葉色豊かに千代八千代 里の助
佳 来る年はいわ紅差して梅花祭 ふみ苑
紅白の梅ヶ香めでし久しの外出 照代
何はさて春待ち心の梅花祭 梅嘉
梅の香に誘われ訪ぬ花の庭 梅はる
春光やこぼれてはずむ笑い声 尚可寿
咲く梅にかわたれ星と尋牛や 尚絹
あこが顔思いのままに天つ星 尚絹
餅雪の花咲き古い木も晴れ姿 市純
梅花祭日向でポカポカ舞妓さん 勝貴
梅の花春を楽しく待ちわびる 勝貴
てまり梅かぞえかぞうるちりとてちん 市すず
梅ふふむ臥牛もほほは笑む花の庭 ふじ千代
白い笠被る紅梅春をよぶ ふみ苑
白梅の香りさそわれ回り道 市ゆう
清香な梅のかおりに春を知る 市ゆう
温かな笑顔咲かせる梅花祭 勝彩
吐く息の白きを見ては恋し春 勝彩

献詠 濱崎加奈子選

一月「窓」

- 年輪を笑顔に刻み同窓の 友と楽しく語る胸襟 岐阜県 波多野千寿子
病室の窓から見える大きな樹 ホスピスケアのシンボルツリー 兵庫県 村島 麗門
御松の窓は今昔眺めよく 夢見の春の光増すなり 京都市 小山 博子
カレンダーめくる如くに窓を開け 昨日と似て非なる風に逢ふ 京都市 若狭 静一
阿弥陀さす小さき穴をふと感ず 灰色の雪に埋まる日々にも 柴橋 美穂
奈辺かと思れば夜汽車の広窓に おのれ見つむる我のあるのみ 京都市 朝比奈崇子
冬の日の窓辺に猫はまどろみて その背にまよふ日向の香り 長岡京市 智野利恵子
うつし世に病養ふ人見れば 窓開く日を偏に願ふ 東京都 白石 雅彦

二月「初音」

- 初音ミクで清春燃やす若人の 心は歌と美舞に酔ひたり 京都市 小山 博子
ケキヨホケキヨだんだん上手くなってきた 求愛うまく進むといいね 兵庫県 村島 麗門
一夜にて春は来つらむ初音する 梅もほころふ北野の御庭 京都市 塩小路光胤
白梅の咲く境内は東風そよぎ 初音に暫し足をとどむる 岐阜県 波多野千寿子

菅公は詩歌に優れ、多くの名歌を詠まれました。室町時代には「和歌の神」と仰がれ、さらに柿本人麻呂と山部赤人と並んで「和歌三神」と称えられています。

三月「理」

- 年月を経るにつれてぞ遠ざかる 夢のあなたの初音うれしき 柴橋 美穂
ふわふわと綿雪楽し飛び跳ぬる 靴の踵は初音奏つる 竹中 美加
この世界に君の歌声初音未求 届いているよ響いているよ 東京都 白石 雅彦

- その季節にはじめて鳴く鳥や虫の声をいう。「源氏物語」初音巻では「年月をまつにひかれて経る人に今日鶯の初音聞かせよ」と、明石の姫君の便りを望む心を詠む。中世には、ほととぎすの初音を聞く喜びを詠む歌が多く詠まれました。
桃梅の咲くや理想の楽天か 甘里のでふてふ導ける春 京都市 小山 博子
待ちわびしワクチン接種三巡り目 疫病去るはことほりなれと 京都市 隴谷 寿
馬の年千里行きては引返す 理に叶へたし拉致の心痛 岐阜県 波多野千寿子
オカリナ・コカリナ・キコリナに 理知の声聴く3月11日よ 兵庫県 村島 麗門
ものふの理かたし早鞆の 時しも波の夕日てりはゆ 京都市 服部満千子
戦ひに理などあるかといひし母 送りて十二の春に戦火燃ゆ 京都市 塩小路光胤
くるくると振れば答は自づから 記憶を辿る理科のフラスコ 京都市 若狭 静一
美しき数の調べは名も貴き 黄金白銀真の理 東京都 白石 雅彦

和歌の世界には似つかわしくない言葉のように思えるかもしれないが、「秋風の吹けばさすがにわびしきは世のことわりと思ふ物から」(後撰集)など、自身の心を世の中の理に置いて納得させる歌などが詠まれてきた。

● 献詠奉納についての問い合わせは、北野天満宮献詠係までご連絡ください。

聖廟法楽和歌短冊外箱の

「今上皇帝」について

当宮には、江戸時代を通じて、当時の上皇や天皇から和歌短冊が奉納されてきた。

寛文四（一六六四）年の後西上皇が奉納されたものが最初で、天和二年（一六八二）年の靈元天皇、延享二（一七四五）年の桜町天皇、宝暦十（一七六〇）年の桃園天皇、明和四年（一七六七）の後桜町天皇、寛政十（一七九八）年の光格天皇、天保十五（一八四四）年の仁孝天皇と続く。

上皇・天皇による和歌短冊奉納は、天皇・上皇の和歌古今伝授に際してなされたものであるが、この詳細は改めて紹介する。

今回は、その和歌短冊を収めた外箱に書かれた「今上皇帝」という表現に注目したい。

短冊を収めた箱は、外箱・内箱・柳箱からなるが（下段写真）、一番内の桐材で作られて独特の形を持つ柳箱に短冊一〇〇枚が収められており、それを収める内箱は桐材でできた印籠箱である。



天満宮 歴史の一齣

京都大学名誉教授

藤井 讓治

この柳箱と内箱は朝廷側で奉納にあたって準備・作成されたもので、箱には墨書等はなく木地のままである。いつぼう外箱は、奉納された柳箱・内箱を収めるためにお宮の側で作成されたものである。その箱蓋の表に、

光格天皇

今上皇帝御奉納和歌

寛政十年歳十一月

と墨書されている（左写真）。この内「光格天皇」の文字は明治以降の後筆である。

中央に書かれた「今上皇帝」は光格天皇であることは、この時の奉納経緯を記した「宮仕記録」により確認できる。

在位中の天皇を「今上皇帝」また「皇帝」と呼ぶことは、特段不思議ではないと思われるかもしれない。

「神皇正統記」で後醍醐天皇のことを「かけまくもかしこき今上皇帝の御事」と記している例もあるが、江戸時代においては多く「禁裏様」「御所様」などと呼ばれており、「今上皇帝」といった表記は日常的にはほとんど見られない。

なお、「某天皇」という呼称は、薨御後に贈られた諡号または追号で、在位中の天皇の呼称では



ない。

外箱表書に「今上皇帝」と書かれていることは、江戸時代において、在位中の天皇を「今上皇帝」と呼ぶことのあったことを示している。

「皇帝」の意をどうとるか、難しいところもあるが、江戸時代、政権を担った幕府のもとで、在位中の天皇を「皇帝」と呼んでいたことは注目される。

なお、和歌短冊奉納の箱書に「今上皇帝」の文字がみられるのは延享二年の桜町天皇の和歌を収めた外箱に「今上皇帝御奉納宸翰和歌」とみえるのが最初である。

天神信仰の主な歴史 (注) 歴史事項 北野天満宮事項 伝説事項

菅公薨去後、およそ百年かけて醸成され千年受け継がれる天神信仰

| | | | |
|-------|------|--------------------------------------|------------|
| 承和十二年 | 八四五 | 菅原道真公(菅公)御誕生(父是善母伴氏) | 父是善との親子の契り |
| 齊衡二年 | 八五五 | 初めて詩「月夜に梅華を見る」を作る | (菅公十一歳) |
| 貞観元年 | 八五九 | 菅公元服 文章生を目指し勉学 | 菅公石清水八幡宮参拝 |
| 貞観四年 | 八六二 | 文章生の試験に合格 | (菅公十八歳) |
| 貞観八年 | 八六六 | 比叡山延暦寺円仁の『頭揚大成論』の序文を書く | (菅公二十三歳) |
| 貞観九年 | 八六七 | 文章得業生となる | (菅公二十六歳) |
| 貞観十二年 | 八七〇 | 方略試(当時最高の国家試験)に合格 | (菅公四十二歳) |
| 仁和二年 | 八八六 | この間少内記(詔勅の起草係) 式部少輔など任ぜらるる(菅家廊下を継承) | (菅公四十四歳) |
| 仁和四年 | 八八八 | 讃岐守に任ぜられる | (菅公四十四歳) |
| 寛平四年 | 八九二 | これにより宇多天皇に挙用され政治の刷新を図ると共に平安京文化の礎を築く | (菅公五十五歳) |
| 寛平五年 | 八九三 | 従四位下『三代実録』『類聚国史』の編纂に着手 | |
| 寛平六年 | 八九四 | 参議・式部大輔・左大弁を経て勘解由使長官 | (菅公五十五歳) |
| 寛平七年 | 八九五 | 遣唐大使に任ぜらるる | |
| 寛平九年 | 八九七 | 渤海客使を接待し詩を交換 中納言従三位 | |
| 昌泰二年 | 八九九 | 正三位に叙し中宮大夫を兼ねる | |
| 昌泰三年 | 九〇〇 | 菅公右大臣に任ず 位人臣を極める | |
| 延喜元年 | 九〇一 | 『菅家文集』『菅家後集』『菅家集』を献上す(三善清行、菅公に辞職を勧告) | |
| 延喜三年 | 九〇三 | 一月二十五日大宰権帥に左遷される 大宰府南館で謫居の日々(菅公五十七歳) | |
| 延喜五年 | 九〇五 | 詩集『菅家後集』を京の紀長谷雄に送る 天拝山で「天満大自在天神」となる | |
| 延喜六年 | 九〇六 | 二月二十五日 配所において薨す | (菅公五十九歳) |
| 延喜九年 | 九〇九 | 味酒安行 大宰府に祠堂を建て(現在の太宰府天満宮) | |
| 延喜十年 | 九一〇 | 菅公を元の右大臣・正二位に叙し 左遷の宣命を破棄す | |
| 天曆元年 | 九四七 | 多治比文字 比良宮神官の子太郎丸らに神託(朝日寺の僧最鎮) | |
| 天曆三年 | 九四九 | 村上天皇により平安京の天門北野に鎮座す | |
| 天曆五年 | 九五九 | 村上天皇勅命により難波宮の地に菅公神霊を祀る(現在の大阪天満宮) | |
| 天曆七年 | 九五九 | 右大臣藤原師輔 北野の神殿を増築し神宝を献ず | |
| 天曆八年 | 九八六 | 慶滋保胤「文道の祖詩境之主」の願文を草す | |
| 天曆九年 | 九八七 | 一條天皇より北野社官幣に預り「北野天満大自在天神」の神号を賜る | |
| 正暦四年 | 九九三 | 北野社は官幣社となり勅祭北野祭が斎行される(江戸末期迄) | |
| 寛弘元年 | 一〇〇四 | 一條天皇御鳳輦御寄進 | |
| 寛弘三年 | 一〇〇八 | 左大臣・正一位 次いで太政大臣を追贈される | |
| 寛弘五年 | 一〇一〇 | 一條天皇初めて陛下を祀る北野社に行幸 以後歴代天皇の行幸に与る | |
| 康和三年 | 一一〇一 | 北野社が国家の大事を祈る二十二社に臣下で異例の加列 | |
| 建久三年 | 一一九四 | 大宰権帥大江匡房により大宰府・安楽寺にて神幸式大祭が斎行される | |
| 承久元年 | 一二一九 | 『北野天神縁起』建久本成る | |
| 承久二年 | 一二一九 | 『北野天神縁起』承久本成る | |

| | | |
|--------|------|---|
| 承和八年 | 一四〇一 | 北野経王堂成る |
| 応仁元年 | 一四六七 | 室町幕府の崇敬で「北野祭」隆盛を極めるも応仁の乱より途絶える |
| 天正十五年 | 一五八七 | 「北野大茶湯」を豊大閣・千利休居士ら催す |
| 慶長八年 | 一六〇三 | 出雲阿国が北野境内で初めてややこ踊り(歌舞伎踊り)を公演(歌舞伎発祥) |
| 慶長十二年 | 一六〇七 | 豊臣秀頼公 北野神社殿を造営する(慶長の大造営) |
| 江戸年間 | 後期 | 後西天皇御宸筆勅願「天満宮」御寄進(三光門掲額) |
| 元治元年 | 一八六四 | 北野をはじめ太宰府・大阪・湯島など主要な天満宮に「和魂漢才碑」建立 |
| 慶応四年 | 一八六八 | 勅命により北野祭臨時祭再興 |
| 明治四年 | 一八七一 | 神仏判然令(神仏分離)により 天台宗比叡山延暦寺のもと社務を統括していた曼殊院との凡そ千年間に亘る神仏習合が終わる |
| 明治三十五年 | 一九〇二 | 北野天満宮 臣下で異例の官幣中社となる |
| 昭和二十七年 | 一九五二 | 太宰府天満宮 国幣小社となる(のち官幣中社) |
| 平成十四年 | 二〇〇二 | 菅公千年大萬燈祭を斎行する |
| 令和二年 | 二〇二〇 | 菅公千百年大萬燈祭を斎行する |
| 令和九年 | 二〇二七 | 例祭(かつての北野祭) 斎行に伴い 比叡山延暦寺と共に北野御霊会を再興 菅公千二百二十五年半萬燈祭を斎行予定 |

今昔マップ

◆ 北野社創建(平安時代) 至現在
◆ 現在の京都

■ 平安京全域
■ 平安宮 大内裏

注① 国都平安京大内裏で千百年間天皇の祭政が執行され、日本文化が育まれてきた。
 注② 平安京・大極殿の天門に北野、鬼門に比叡山、宇多天皇創建の仁和寺などが精神的中心となって熟成の礎となった。
 注③ 八幡さま、稲荷さまを始め多くの神仏は国都平安京(元の国都平城京)の近畿より全国に伝播。



紅梅殿結婚式

日本文化の発信地、 紅梅殿からはじまる家族の日

貞観元年（八五九年）菅公が十五歳の元服の折、母君は菅公の前途を祝し、

『久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな』の和歌を詠み励まされました。

我が国で最初に家風を表されたのが、菅公の母君であつたと伝えられています。立派な家風をもった稔り多い新たな家庭を築かれますようにとの願いをこめて、菅公邸宅ゆかりの紅梅殿での神前結婚式から新しい「家族」がはじまります。



火之御子社例祭 六月一日

雷除大祭

かみなりよけたいさい

●特別授与品の頒布

雷除けのお守・お札を開門より特別に授与致します。このお札は、「北野千体札」と称され、古くはこの日限り、千体限定の授与でしたが、近年はこの日より一ヶ月間授与しており、郵送での授与も受付しております。



六月三十日午後四時

なごしのおおほらえしき

夏越の大祓式

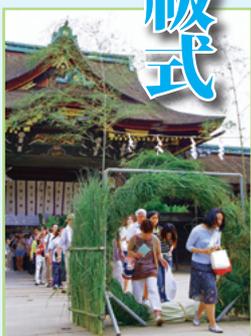
●茅の輪をくぐって、
無病息災を祈願！

午後四時から神事を執り行い、神職とともに茅の輪くぐりを行います。茅の輪をくぐり、半年間知らず知らずのうちに身につけた厄難を祓いましょう。

●人形・車形でお祓いをしましょう

人形にご家族それぞれの氏名・年齢を記します。次に人形で身体を撫で、三度息を吹きかけます。人形は祭礼日まで当宮に納めて下さい。交通安全祈願として、車形もあわせて納めましょう。

※氏子区域の皆様には、氏子総代を通じて形代をお配りします。



どなたでも神事に
参加できます。

御縁日 境内ライトアップ

毎月25日は天神さんの御縁日。
境内特別ライトアップ！

定期購読のお知らせ

- 定期購読 1,000円（1年分）
季刊・年4回発行
- 学校・教育機関でお申込みの場合は無料発送。
- お申込み・お問い合わせは、社務所まで。



右記QRコードを携帯電話やスマートフォンで読み込むと北野天満宮の最新情報にアクセスできます。上記の各SNSでもご案内しております。

今昔マップ



平安京

当宮は平安京の乾に位置し、古くより天のエネルギー、パワーの働く北野の地に祀られています。

平安京の内裏、大極殿北西に位置し三光門の真上に北極星が輝き、天子様が北極星を拝する聖なる社でした。

平安京の大極殿（遷都より600年の間）は今の京都御所の西にありました。

紙屋川、堀川に挟まれ、すぐ北西に当宮が建てられています。

- 平安京（大内裏）
- 大極殿（室町時代迄の平安京）
- 京都御所（室町時代以降の平安京）

